

永遠の乳房

賀川豊彦著



エジプトのヌツ+シクスと私

PL832.A4

E43

1925



時々のソノレキのヤシノミ

私は詩の外に書けない男であるかも知れぬ。私はそれが上手、下手と云ふことを離れて、私の胸の渦巻に、さうした旋律の外、感ずることが出来ないものである。私に取つては、科學も、哲學も、宗教も、經驗も、生活も、凡てが、詩になる。内なるものは内なるものゝ生命の詩となり、外なるものは、表象の詩となる。

私は、これから、もう少し多く詩を書くであらう。私の眼が悪くなると共に、「詩」がミルトンの耳朵に囁いた如く、「詩」も私に多く物語る。私はそれを待つことなくして書き附けておけば善いのである。私は詩に支配せられてゐる。たゞ不幸にして、私は詩をよう支配せぬ。私はたゞ魂と愛と眞勇と十字架を歌ひたいのだ。私はその爲めに、囚はれた。

十二月の太陽が、本所のバラツクの硝子障子をポカ／＼照らす、一昨日秋田市から歸つて來た、私には南の太陽がうれしい。保育所の子供等は足調子面白く「マーチ」につれて踊を續けてゐる。

善いことの爲めに。そこに、私の詩があらねばならぬ。

蠶は一眠、二眠、三眠をねむり、肉體はやがて、透明體に變る。私にもその透徹する魂の詩が欲しい。

私の詩は、私の生活である。私の生活は、私の詩である。言葉は、私の詩のいと小さい一部分にしか過ぎない。

「涙の二等分」以後、私は、多くの散文詩を書いて來た。「地殻を破つて」「星より星への通路」「雷鳥の目醒むる前」「地球を墳墓として」の四冊には部分的であるが、私の生活を通じて見たる散文詩が出てゐる。その外に、私は過去七年間に、自由詩の形のものゝ百數十篇書いた。今こゝに一纏めになつたものは、それを集めたものである。それは私の作つた詩の凡てではない。然し發散したものゝ凡てである。中には數篇ずつと舊いものがある。

私は、歐洲を廻つて、たゞ幾十篇かの詩だけをノートに書きつけて來た。

永遠の乳房 目次

I 坊やの赤飯

坊やの赤飯	一
わが兄による陶酔	一六
置き忘れた生人形	二〇
ふーちゃんの間問	二五

II 大水は聲を擧ぐ

神よ日本全土を守り給へ	三三
大水は聲を擧ぐ	三六
留置場の歌	四〇
塵紙にかきつけし歌	四九

III 全市響

全市響	五五
石井十次の胸像の下にて	六一
秋の空	六四

私は本所の「愛の集團」にこの上なき喜悅を感じて居る。そこには、輝かしい顔の持主である今井さんが居るし、律義な働き手の木立さんが居る、忠實な黒川さんが美しい顔をして、こまめに働いてくれる。ゲルシオンは泥中の蓮のように、苦海から伸び上つて、私等の上に引き上げてくれる。イエスの群の幾十人か、幾百人かは、みなうれしい「魂の藝術家」として、みな輝く顔を持ち寄る。そこには勿論貧しい人々の子供等の天の使の顔もあり、地殻を刻む創作家としての労働者の顔もある。

地震の爲めに出て來た私は、本所で幸福な私を發見した。神戸の悲しみは、全く癒された。それで、私はまた西に歸つて行く。そして、また嘆きの子とならう。それもまた、私の藝術であらねばならぬ。

一九二五・一二・三

賀 川 豊 彦

本所松倉町バラックにて

若き人の群よ——新人會に捧ぐ

丹 波 栗

あん焼のおぢさん

向隣のやんちや小僧

揚子江の屍

河南の平原

VI 街頭にて歌へる

勞 働 歌

普通選舉の歌

勞働祭の歌

祝福されし神戸

生産者の歌

勞 働 歌

兒童愛護の歌

深草青年團々歌

國爾寮の友の爲めに

誰が子ぞ酒杯に親しむは？

VII 魂の分泌物——一日一詩

魂の分泌物

一一六

一一九

一二三

一二三

一二五

一二七

一三三

一三四

一三六

一三八

一四〇

一四三

一四五

一四六

一四八

一四九

一五三

IV 銀

しぐれ雨の後	六五
沈む夕日	六七
プラットホームの音楽	六八

の 簪

銀の簪	七一
あやめ咲く頃	七二
港の啓示	七五
知らざる友に——肺病の——	八〇
金澤の或る祭	八二
エルサレムの滅亡	八四
Flight	八五
哀歌	八七
阿彌陀山頭	九〇

V

我等が心燃えしに非ずや

我等が心燃えしに非ずや	九五
浦上の聖堂にて	一〇六
教場で	一一〇
北海道	一一三
選舉の後	一二三

VIII

夕闇の春日の鹿

夕闇の春日の鹿

一九九

天平の精霊

二〇一

大天井の頂——日本アルプスの歌

二〇三

柿の葉の落つる頃

二〇五

孤立せる富士

二〇九

ヘルリ提督記念碑の下にて

二一一

電車 の 響

二一七

光の優しき掌

二二二

IX

定濟屋の箆笥

その灰燼の悲しみに

二二二

十字街頭に立ちて

二二四

日比谷の十字路

二三八

祭の太鼓の消えた後

二四二

あゝ娘は歌ふ

二四五

定濟屋の箆笥

二四九

X

太陽を胎んだか、日本の娘よ

太陽を胎んだか、日本の娘よ

二五五

無花果の下にて	一五八
夢の芽蒔ゆる頃	一五九
風	一六二
車窓沈思	一六五
瓦の砂漠、大阪	一六七
鹿兒島	一七〇
阿里山森林にて	一七一
夕暮	一七四
ジャンケンホイ	一七五
待合室	一七六
急行電車の祈	一七八
涙多き此頃	一八二
汽車は出る	一八三
あしたの電燈	一八七
朝のよろこび	一八九
争議の翌日	一九〇
電線の燕	一九二
オフキイスにて	一九三
絶望の淵より	一九五
奇蹟	一九七

エザンバラ城……………三三八

L. K. 1572……………三三〇

それは正當なりや……………三三六

ノットルダムの祈——巴里にて……………三四一

テアテル・デュ・フランセエ……………三四四

ヴェルダンの守り……………三四八

獨逸の爲めに……………三五〇

デンマークの雲雀に與ふ……………三五七

ウキツテンベルヒの教會にての祈……………三六七

ルーテルの室にて……………三六九

ヴェニス……………三七二

ゴンドラ船……………三七五

サボナロラの墓石の上に立ちて……………三七四

メザチの墓にて……………三七六

シオットの畫けるフランシス……………三七八

カタコム……………三八一

ゲッセルマ……………三八二

ベタニヤのマルタの家……………三八六

あゝエルサレムよ……………三八八

シロアムの池に 眼を洗ふもの……………三九二

XI

日よ 歩みを止めよ——日本を外に

日よ 歩を止めよ——ハワイの友を歌ふ……………二七七

静かに東雲を瞬く——ホノル、の街に……………二八一

まごろみ得ぬ月夜……………二八五

メンデルゾーンの “Contemplation” ……………二八九

ミッシヨン・ホテルにて……………二九四

それではイエス様おやすみ！……………二九五

インベリアル・ヴァレーは魂を持つ……………三〇〇

リンコルンの涙の故に……………三〇二

刺戟の交響樂……………三〇四

ニューヨークよ、さらば！……………三〇六

太西洋の波の上に踊るもの……………三〇九

東に住むもの歌を持つ……………三一二

何故 我を涙の爲めに造りしか？……………三一三

セント・パウロのカシドラルにて……………三一八

セント・パウロの塔の上……………三一九

歴史の足跡……………三二二

クロムエルの銅像の前にて……………三二三

ロツチデールの協同者……………三二六

坊
や
の
赤
飯

I

XII

神よエルサレムを興し給へ	三九二
美し の 門	三九五
カペナウムにて	三九六
サハラの砂漠に日が沈む	三九七
愛する日本	三九九

永遠の乳房

永遠の乳房	四〇一
-------	-----

坊やの赤飯あかま

坊やはうやが 生うまれて

三十日にち

今朝けさはうれしや

赤飯あかまたいて

近處きんじよ九軒けんに くばりましよ

坊やはうやが 生うまれた

その時ときに

パパは

村むらの人ひと々の

人の爲めには
片肌ぬいで
いつも苦しむ
癖がある。

パパの
一つの心配は
坊やが
貧乏なこの町で
育つかどうかの
問題だ。

パパは
坊やも知るまいが

小作争議こさくさうぎに

忙いそしく

村むらから
村むらを

かけ廻さばり

寒さむい冷つめたい北風きたかぜに

めけず
奔命ほんめいしてゐたよ

坊ぼうやは

未いまだに

知しるまいが

パパアは

貧乏びんぼうのその中うちに

持もつて生うまれた

性分しやうぶんで

お家に暫時

引越して

南京虫の巢の中で

おまへを

神への牲に

捧げたつもりで

育てます。

おまへが

大きくなつた時

パパと

ママの

その眼が

なぜに

日本にほんの貧みうしい人ひと々に

一生しよつか仕つかへて

死しにたいの

それで

おまへが生うまれても

村むらにも山やまにも

引越ひっこさず

貧民窟ひんみんくつの

表筋おもてぢぢ

三軒長屋げんながやの

その端はしに

ママママの

善いい善いい母かアちゃんの

——つまりおまへの祖母はアちゃんの——

毛布けふとに 包つんで

ま、まアに負おはせ

ま、まアも

それを

苦くにもせず

近所きんじよの人ひとの

眞似まねをして

ピン／＼

そこらを

飛とび廻まわる。

坊ばうやよ

坊ばうやよ

ねんねしな！

兩方開かないと

尋ねる時に

知つてくれ

おまへの親は

二人とも

人に仕へた

その爲めに

お眼が

いつも悪いのだと

パパは

おまへが生れても

お守の一人も

雇はずに

近所きんじよの子供こどもを

眞似まねないで

善いい 善いい

子供こどもに

なりなさい。

ババアは

十五の

その日ひまで

村むら 随ずい一の

悪あく太郎たらう

癩癪かんしやくもち持もの威張おはりやで

手てにもおへない

ものでした。

坊やの

寝むつた

その後で

パパは

眞夜中

眼をさまし

村の小作の人々や

街の貧乏な人々の

苦勞を靜かに

思ひ出し

神に一々祈りませう。

坊やが

大きくなつたとき

おまへが

チンピラに

なるよな事ことが

あるならば

どうか、大おほきくならないで

幼をさない時ときに 死しんでくれ！

坊ぼうやよ パパは

それが 心しん配はいで

心こゝろの中うちで泣ないてゐます。

坊ぼうやよ 赦ゆるして頂ちやうだい戴だいよ

たとひおまへが大おほきくなつた後のち

悪わるい子こ供どもになつたとて

パパは決けつして 捨すてませぬ。

坊^{ばう}やが

パパアの血^ちをうけて

癩^{かんしやくもち}癩^{かんしやくもち}持^{もち}で 威^お張^びりやで

貧^{ひん}民^{みん}窟^{くつ}の チンピラと

仲^{なか}間^まになつて

騒^{さわ}いだら

パパアはどんなに

悲^{かな}しかろ？

パパアの

ほんとの心^{しん}配^{ぱい}は

全^{まった}く 此^{こゝ}處^ちにあるのです。

もしも

そんなに泣く時は

パパは

自分が罪人で

坊やに

すまない氣がします。

坊やの

お家は新川の

五軒長屋の

西の端

たとひ

坊やが

出世して

豪いお人に

パパアを決して 疑はす
すんく 延びて頂戴よ

坊やよ

坊やよ

なぜ 泣くの！

お前の顔のその皺は

パパアによく似た

皺がある

顔をしかめて

泣く様は

パパアの泣くのに

善く似てる。

坊やが

おまへは

獨逸^{ドイツ}のデューレルが

畫^{えが}いたマルチン・ルーテルの

それにも似^にたる顔^{かほ}をして

パパアの跪^き拜^{はい}を待^まつてゐる。

坊^{ぼう}やよ 坊^{ぼう}やよ

ねんねしな

おまへが^{おほ}大きくなつたとき

パパアは おまへに

友^{とも}を得^えて

プロレタリアの戦^{たたか}ひに

二^{ふた}人で一^{いつ}緒^{しょ}に行^ゆきませう。

坊^{ぼう}やが 生^{うま}れて 三十^{にち}日

なつたとて

パパアの

苦勞くろうを

憶おもひ出だし

貧みうしい世界せかいの

人ひとの爲ため

戰たたかふことを

忘わすれるな

パパアは

おまへの 無む二にの友とも

おまへの

寢顔ねがほを のぞきこみ

『聖者せいじゃ』とおまへを呼よびました。

棺桶くわんをけである。

私の可愛かあいい坊ばうやは

消化不良せうくわふりやうと口腔こうかうの病氣びやうきと

結核けつかくの爲ためめに倒たふれた

私が貧民生活ひんみんせいかうをした犠牲ぎせいのために

——すまない——

こんな幻まぼろしは見みたくない

眼めをぱつと開ひらくと

三等客車とうさやくしやの室内しつないは

タバコの煙けむりがもうくと立上たちあがつてゐる

その煙けむりの中なかに猶なほ

坊ばうやの顔かほが偲しのばれる

今日は うれしや

赤飯炊いて

近處九軒にくばりましょ。

わが兒による陶酔

汽車の窓に倚つて

眼を閉ぢると

小さい丸い棺桶が

眼の前に見える

それは 今迄 私が多くの

貧しい子供等を葬つた

(一九二三・一・二五)

善くならぬ顔色——

それらがみな一々心配になる——

性慾よりも女よりも

更に面白きわが兒の生ひ立ち

戀以上に我を恍惚とさせてくれる

生の表現の陶酔——

私はたとひ

わが兒を失ふことがあつても

この陶酔を與へてくれた瞬間に對して不平も何にも無い。

兒を持たぬ中に

兒に對する愛など考へたことも有つたが今は生れ變つたものゝ如く

新しき世界に自らが

足を踏み込んだことを思ふ。

旅に出で 夜寝る時

戀人の如く 吾兒の顔が現れる

立つ時に、悲しみの中に立ち出で

再び出る時は 坊やと一緒にならでは

旅に出るまいと 思ふたことなど

旅枕——うとくする中に

坊やが いつもするように

鼻と鼻と相接し

耳朵にふれ、眼の上をなで

ニコニコする姿が 眼の前に浮ぶ

父は彼の顔の上にひかれた

いと小さい擦り傷の歴史まで覚えてゐる

小さい咳、眼にたまる眼やに

産れてから三月目位から

天てんの使つかひが　また　もう一人ひとりの
小ちひさい人にん間の芽め生はえを
天てん窓まどから　一寸ちよつと　投なげ込こんで
行いつて　くれたものですから
うれしいことです。

おむつが　森もりの間あひだに

満まん艦かん飾しよくのように　輝かきやいて

ゐるぢや　ありませんか？

鶏にほとりも　パビも、みな

喜よろこんでゐるぢやありませんか？

コカツコツコ／＼、ビヤウ／＼

軒のきの雀すずめも　喜よろこんでゐますよ

「武藏野むさしのの　北澤きたざはの小屋こやに

置忘れた生人形

赤ン坊あかぼうは 産うまれたのですか？

生はえたのですか？

鶏小屋にほとりこやの 側そばで

市松人形いちまつにんぎやうの やうに泣なくのは

天てんの使つかひが置忘おきわすれて行いつた

人形にんぎやうぢやありませんか？

何なにしろ 目出度めでたいことですか？

パパアが 歐おう洲しゅうに行いつて

留守るすの間まに

特別に 晴れたことでせう
天の使が 天から落ちて來たのだから
それ位のことはありますよ。

遠見の富士も 今日

にたゞ 微笑んで くれませう

ロンドンにゐるパパも

うれしいので ニタ／＼ 笑ひました。

私は どうしても

産れたとは 思へません

生えたのです！

生えたのです！

如何にも 自然に

赤^{あか}ン坊^{ぼう}が 一^{いっ}匹^{びき} 天^{てん}から落^おちて來^きた」
と云^いつて 大^{おほ}騒^{さわ}ぎをしてゐるのが
私^{わたし}の耳^{みみ}に聞^{きこ}えます。

坊^{ぼう}やは 妙^うな顔^{かほ}をして

赤^{あか}ン坊^{ぼう}の顔^{かほ}を見^みてゐませう

おかしい奴^{やつ}が？

何^{どこ}處^こから 來^きたのか 知^しら？

私^{わたし}の乳^{ちい}を盜^とる奴^{やつ}は

おかしな奴^{やつ}だと

ねたましくも 思^{おも}つてゐませう。

然^{しか}し何^{なに}しろ、目^め出^でたいことす

その日^ひは 武^む藏^{ざう}野^のの空^{そら}も

ふーちゃんの訪問

『チャーチャン！』

『チャーチャン！』

隣となりの桶屋をけやの

ふーちゃんが

ひき戸どの

隙すきから 首出くびだして

私わたしの妻つまを呼よんでゐる

ふーちゃん

今年ことし 二つふたはん

鶏頭畑に 鶏頭が

生えるように

生え上つたのです。

新しい 赤ン坊は

大地から 生えたのです

春の日に

武蔵野の 椋と樺の下に

生えたのです。

まア 何しろ 目出たいことです。

私は 土地から

赤ン坊を 突出してくれた、

大地の精に お禮を云ひませう。

(一九二五・四・二七、ロンドンにて)

ふーちゃん

なかよしで

なんでも二人^{ふたり}で

たべまする

二人^{ふたり}は妙^{めう}に

連れ立^{つだ}つて

私^{わたし}のうちに

きてくれる

私^{わたし}の家^{うち}の

軒^{のき}先^{さき}で

Sと

ふーちゃん

つくなんで

頭の髪は

蓬のやうに

生えたら生えたで

生えながし

きものは汚で

キンピカリ

桶屋の隣の活動の

仲賣さんの

チンコロは

その名をSと

申します

Sと

もすこしくれよと

まつてゐる

ふーちゃん

首^{くび}を^{エス}Sにむけて

また　またすこし

なめたのち

のこりのキヤラメル

Sにやる

みんなやるのは

まだおしい

右^{みぎ}手^てにしかと

つかまへて

二人^{ふたり}でキャラメル
食^くつてゐる

ちよつと

ねぶつて

S にやり

S のねぶつたその後^{あと}を

ふーちゃん

うまそうに

しやぶります

S^{エス}も人間^{にんげん}になりすまし

桶屋^{をけや}の娘^{むすめ}の

顔^{かほ}みあげ

布衣^{ほい}ない

ふーちゃん

うらめしい

半分^{はんぶん}涙^{なみだ}を

眼^めに湛^{たみ}え

また また

ひき戸^どの

隙間^{すきま}から

『チャーチャーン！』

『チャーチャーン！』

呼^よんでゐる

少し残つたその端を

手先でSに

なめさせる

Sはそれが

きにいらぬ

すべてをくれと

かみついた

ふーちゃん

あはてゝ

手をはなす

Sは得意な身振して

キヤラメルひとりでなめました

II

大水は聲を擧ぐ

神よ 日本全土を守り給へ

神^{かみ}よ 日本^{にほん}全土^{ぜんど}を守^{まも}り給^{たま}へ みめぐみの主^{しゅ}よ

この國^{くに}より 罪^{つみ}をけし

悲^{かな}しみの淵^{ふち}より ひきあげ給^{たま}へ みひかりの主^{しゅ}よ

闇^{くら}き 嘆^{なげ}きに 災厄^{さいやく}に 救^{すく}はせ給^{たま}へ 萬軍^{ばんぐん}の主^{しゅ}

暴風^{ほうふう}は こゝに進路^{しんろ}を選^{えら}び

地震^{ちしん}と海嘯^{つなみ}は こゝを脅^{おびやか}す

あゝ主^{しゅ}よ 顧^{かへり}みさせ給^{たま}へ 我國^{わがくに}を

こゝに 争鬭^{あらそひ}の聲^{こゑ}をきかず

やわらぎと 互助^{ごじょ}の讃美^{さんび}をきかせ

とこしなへなる 勝利^{しょうり}に入^いらせ給^{たま}へ

子供等の胸に 溫順を秘め

民はとこしへに 自ら治め

榮ある發明の民たらしめ給へ

義に對して さとく

愛には 感奮し

世界の國土に 光を投げさせ給へ

この國より――

そは 物質の力によらず

内なるものゝ力―― 汝の力によることを 示させ給へ

み光の主よ 父よ

貧^みしきは虐^しげられず

富^とめるものは惜^をしみなく散^ちらし

叡^{えい}智^ちもてこの國^{くに}をさきはひ給^{たま}へ

善^{ぜん}の外^{ほか}に何^{なに}者^{もの}の支^し配^{はい}者^{しや}なく

愛^{あい}の外^{ほか}に權^{けん}威^ゐなき國^{くに}たらしめ給^{たま}へ

みめぐみの父^{ちち}

たとひ太^{たい}平^{へい}洋^{やう}の波^{なみ}

この岸^{きし}を洗^{あら}ふとも

みめぐみの波^{なみ}こゝを洗^{あら}はずば如何^{いか}にかせん

黒^{くろ}潮^{てう}の進^{すす}むまゝに

たぎりたつ清^{せい}淨^{じやう}の血^ちわかさせ給^{たま}へ

この國^{くに}に一^{ひとり}人^{にん}の娼^{しやう}婦^ふあることなく

醉^{よひ}と頰^{たは}癢^{はい}を拭^{ぬぐ}ひ去^さり給^{たま}へ

乙^を女^{とめ}の頸^{くび}に貞^{てい}操^{さう}の玉^{たま}をむすび

やさしき雨が堤を破つた！

静かに落ちる滴が聲を出し初めた！

百萬滴の水は大水となつた！

大水は聲をあげた！

大水は聲を擧げた！

柔和にして愛らしく透明にして美しき凡てを養ひ凡てを包み凡てを恵み

凡てを祝する點滴は、今大聲をあげて、地平線の上に吠え狂る。

大水は聲をあげた！

十萬方哩は水に浸つた！

地上は凡て水の征する所となつた。

何者も水に勝つことは出来ない！

無力なりし水は、今、関の聲をあぐ！

上に水あり下に水あり、水は川を逆に上り川床を動かし小山も岡もみな

崩してしまつた……

大水は聲を舉ぐ

——八月五日橋分監にて——

大水は聲を舉げた！

大水は聲を舉げた！

山に里に海に大水は聲を舉げた！

空は四十日四十夜閉されて夫の水口が切れたかの様に大水は注がれた。

滴、一滴、雨は降る。

雨垂れは美しくやさしい！

虹もその間に交つて居た。

然し一滴、一滴降る雨は野山を蔽ひ大海にまで翼をのべた。

降るよ、降るよ！ 雨は降るよ！

號を建造した。

それでも生産者は聲を擧げなかつた。

然し一滴一滴垂れ重なつた勞働者の汗は天地を蔽ふ水氣と相通じた！

惡虐に泣く無産者の涙も資本主義の搾取に枯れた裏長屋の幼年工の血も

世界脈々の水氣と相通じた！

水準は高まつた！

水は堤を切つて流れた！

大水は聲を上げた！

大水は聲なくして聲を放つた！

解放せられたるものには常に聲がある！

大水の聲は大きかつた。

地軸も震ひ上るほどの聲は大きかつた。

地球が水の上に浮び上つたのではないかと思はれたほど、その聲は大き

かつた！

アララツトの山頂も、今や水底に沈むだ！

靜かに澄める生産者の心には、常に柔和にして、常に透明なる人類の祝福が秘められてゐる。

彼は水の如く親切であつて、水の如く愛らしい。

彼は春日雨であり、彼は暑氣を消す時雨である。

彼は虹もて人類を導き、蜃氣樓もて砂漠に等しき人の世を色づける。

彼は永遠に生命の水であり、永遠に凡てを包含する海洋である。

世界の一隅になさるゝ最少の労働も、時によると地軸を傾けるアトラスの挺にも劣らざることがある。

生産者は實に地球の廻轉そのものを司どつてゐるのである。

然し、いと小さき生産者は嘗て訴へることをしなかつた。

彼はピラミットを作り萬里の長城を築いたがそれでもまだ不平を云ふことを知らなかつた。

彼はパナマの運河を掘り、沈没することを知らぬと云はれたルスタニヤ

冥想と祈禱に 執筆に

獄屋であることを忘れて

日を送る。

そして

いつとはなしに

日は暮れてゆく。

二

朝の四時半から

晩の十二時一時まで

通りつゞけの電車は――

この獄屋は電車道に沿ふてゐる――

獄屋を震はせて、一分おき位に走る

土塀の向ふは

海嘯も、海潮も、洪水も、瀑布も、凡て聲をもつ！
然し靜かに注がれる無産者の血と涙も海嘯と洪水に劣らざる大聲をもつ！
大水は聲をあげた！
實に大水は聲をあげた！

留置場の歌

——神戸三ノ宮警察署の留置場にて——

一

獄屋の屋根に

日は暮れる、

獨居を喜ぶ私は

私の意志は動かない！
自由の日は来るまで
私は今の道を取つて
動か無い！

四

監房に旭照り輝く——神よ
窓に屋根に板塀に
鐵柵に腰掛に、
神よ

私の監房は
みめぐみの御園です
神に居るものを
捕へようと云ふのは

綺羅きらを飾かざる乙女等をとめらの乗のる

電車でんしゃが走はしつて居ゐるのだ――

そして私は労働者らうどうしゃの煽動者せんどうしゃとして

罪つみもないのに

囹圄れいごの身みとなつた、

今更いまさらあらだてゝ

資本主義しほんしゆぎを呪のろふまでも無いが

監房かんぱうの裡うちに

久ひさし振ふりに取とり返かへした

獨居どくきょのよろこびを感謝かんしゃする。

三

百度ひゃくど監獄かんごくに繫つながれようが

百年ひゃくねんの長ながき間監禁あひだかんきんされようが

一萬五千の職工が

章太天走りに

突撃する時でも

私の心は平靜です。

私の心の平靜を

何人が破り得ませう

わが神――

八十五人の最高部を

擲へる爲めに

隣りの齒醫者の壁を

打破つて

十手や捕縄で襲撃に來て

私の身邊に五人の刑事が

立ち圍む時も

無理です。

私の魂は

旭日の光と共に

東より西へ南へ北へ

全世界に飛んで居ます。

私は祈つては

監房を忘れ忘れては

忘れて居る身の幸福を感謝して居ります。

五

私はどんな時も

騒ぐ心は持つて居りませぬ。

數萬の労働者が赤旗黒旗で

示威行列を行つて居る時でも

絶叫せしめる

私は行動する――

それが善いことだと思ふたことは
死地に陥入れられても決行する。

六

私は友なる三萬の労働者を捨て、

一人安居することは出来ない

彼等の悪、彼等の失敗と躓き――

それらに對しても 私はその責任を

全部帯びる

私は 今になつて

三萬の労働者を捨て去ることは出来ない。

私の心は平靜でした。

私は謀叛人ぢやあるまいし

強盗ぢやあるまいし

弱者 貧者の解放の爲めに

身を粉にして働いて居るのだ

私を捕へたければ

捕へるが善い――

私は生れ付き暴力とそりが合は無い――

十手にも 捕縄にも

ピストルにも ドスにも

反抗するような人間では無い。

私の靈は自由を知る。

私が善いと思ふたことは

たとひそれが私を牢獄に導くものであらうとも

八

死^じねなら 彼^{かれ}等^らと共^{とも}に
 罰^{ばつ}せられるなら 彼^{かれ}等^らと共^{とも}に
 たゞ 私^{わたし}は 解^か放^{ほう}の日^ひの爲^ために
 強^{きよ}く 生^いきて居^をりたい！

(一九二一・七・三〇)

塵紙にかきつけし歌

——監房にて——

眞^ま夜^よ中^{なか}の 一^じ時^じは鳴^なりぬ 二^じ時^じきゝぬ
 醒^さめたる 我^{われ}は 獄^{ごく}の虫^{むし}とる

七

これ程^{ほど}までに虐^{しひた}げられ

これ程^{ほど}までに蹂^ふみつけられた

三萬^{まん}の友^{とも}等^らが

今^{いま}になつて怒^{おこ}り出^だして

何^{なん}ものゝ云^いふことも

聞^きかずに

手^て傷^やひ猪^じのよう

驀^{もく}進^{しん}する時^{とき}

その時^{とき}でも

私^{わたし}は 彼^{かれ}等^らを振^ふり切^きる

勇^{ゆう}氣^きは無^ない。

監房に 一杯の水 うくるとき
人のなさけの ありがたくもあるかな

冥想の その折々の 身のたるみ
疲れ果てたる このみぞ憎き

朝夕に 數度居直り わが神よ
千歳の磬よと 強く祈りぬ

南なる窓よりもるゝ 太陽は
その輝きを かくさざりけり

たゞ一人 獄の内に 友を得ぬ
蠅とり蜘蛛は そのひとりにぞある

監房は 思つたよりも かまびすし

隣の室の いかに賑はしき

看守等の 心めでたや 朝顔を

鐵窓つたひ 植ゑしゆかしさ

猿のよう 兩手をのばし 柵いだき

外見る子らの 心悲しや

右に向き 左に廻り あちこちと

獄屋の中を 我は歩めり

わが友は 監房の戸口に 額あて

よゝとぞ泣きぬ 眼もあてられぬほど

電燈でんとうの光ひかりは鈍にぶし 本ほんはなし
閉とぢたる眼めには 灯ひの用ようもなし

監獄かんごくの みかげの垣かきの 夏なつ日びうけ
きらめく時ときの 美うつくしいこと

一坪つぽ五勺しやう ひろくもあらぬ 獨房どくぼうを
ぐるく廻まる 室内しつないの旅たび

獨房どくぼうの、中なかを ぐるく廻まりつゝ
塵紙ちりがみとりて 文字もじを書かく我われ

獄屋ごくやまで もりくる響ひびき ハンマーと
川崎かはさきの笛ふえの 憎にくくもあるかな

いつまでも　いつまでたつても盡つぎざるは
監房かんぼうの窓まどを　よぎる　夏雲なつぐも

折をり々は雜巾絞ざふしほり　床ゆかをふく
我われを顧かへりみ　ひとりほゝえむ

僧房そうぼうの　その生活せいくわつに似にたるかな
我われとみ神かみと　二人ふたりにしあれば

薄明はくめいの　それにも似にたるわが心こころ
祈いのれる時ときの　白日はくじつの空そら

三年さんねんも　五年ごねんも　此處こゝに置おかれても
神捨かみすてされは　うきことはなし

全

市

響

III

夕ゆふまぐれ 牢らうの高壁たかべい、打越うちこえて
うれしげにきく 子こらの呼よぶ聲こゑ

「だれのとなりに たれが居ゐる」 聲こゑ打ち揃そろへ
呼よぶ聲こゑに 我われは牢屋らうやを忘わすれてありぬ

雑巾ざふきんを 硝子がらすにあてゝ 顔かほみれば

わが口髭くちひげは ものになりけり

暑あつければ 差入さしいれの扇あふぎ ばたつかせ
風かぜを送おくりぬ 夜よの目めもねずに

ひまなれば 水みづもてあそび 顔洗かほあらひ

ひとり戯たはむる 腕うでつきこみて

全市響

膳ぜんの上うへに

箸はしをおいて

私わたしはきく

若松市わかまつしの 全市響ぜんしきやうを。

渡しわたしを越こえて

戸畑とばたの笛ふえもなる、

低いひく ベース

高いたか アルト

鳴なるよ！

北九州きたしゅうの全市響ぜんしきやうが、

人間の體は震へ上るよ、

働くことのうれしさに

空も地も彼を

乗せて震ひ上るよ！

争鬭も、憎しみも、悲哀も、

何にもかも凡てを忘れて

勞働者は

働きのうれしさを感謝する！

雨のふりつゞける

その中に

ビシヨリ／＼と

彼等はぬかるみの中を

家路に急ぐ、

全市響よ！ 全市響よ！

生活せいかつの旋歌せんかに、

空そらを震ふるはして 鳴なる！

『午後六時ご、ろくじの 全市響ぜんしきやう』が

障子しょうじをひい、らせて鳴なる。

『あれを聞きくと

私わたしは 身みが躍をどる』と

口くちの中なかで呟つぶやく。

職工しよくこうは 工場こうばから

飛とび出だしてくるであらう！

妻子さいしは 身體からだををどらせて

夫おつとと親おやの家うちに 歸かへつてくるのを

待まつて居ゐよう。

勞働らうどうを終をへた そのうれしさに、

生の歡喜に 溶け入る
讚美歌だ！

歡喜の聲をあげよ

都會よ、市よ！

實在することのよろこびと

走ることのよろこびと、

急行列車と自動車と、

スチーム・タ・ア・ヴィンとデ・ゼルの

よろこびを歌へ！

大八車と、馬力車と、

汽船の笛と、屋根の上に落つる

雨の音と、

今日も 労働者は

祝福された そのうれしさに、

煙筒も、

煉瓦塀も、

コークスの山も、

灰色の土も、

凡てが、交響樂の中に

溶け入るかの如く

全市響が ひびく

あれは 笛が鳴つて居るのぢやないのだ！

煙筒と

工場と、

全市の屋根と、

いや都會全部が

續いて居る――

アルト・テナ・ベース、

大洋の響のやうな

聲もある！

まだ、全市響がひどく！

全市響！

全市響！

(一九二二・二・七 若松市にて)

石井十次の胸像の下にて

三人の嬰兒に 包まれ

石井十次は

凡てが溶け合つて、

都の音を作る

そして

その上に

全市の生が

全市響として

爆發する！

全市に住む、

労働者が叫ぶ代りに

全市の工場の笛が

今夕の讚美歌に和する。

アレ！

全市響がまだ――

うれしげに

石井十次の

基石をめぐり！

うれしげに

天を見上げて

児童は踊る

手をうちつらね

うれしげに

児童は踊る！

朝露あさつゆを浴あびて 立たつ。

慈眼じがん溫容おんようの丈夫ちやうふ

勇氣ゆうきと 信仰しんかうの

闘士とうし

子供こどもの友とも

貧まうしきを ねぎらひ

傷いためるを 憐あはれみし

彼かれが 幾いく十じゅう年ねんの苦闘くとう

見みよ

岡山おかやまの――

門田屋敷かどたやしきの

その一角ひとかくに

嬰兒えいじは踊をどる

上^{うへ}に下^{した}に 縦^{たて}に横^{よこ}に
とぶはく 黄^{きいろ}い葉^は 赤^{あか}い葉^は。

そこにあるもの 皆^{みな}は 浚^{さら}はれた！
青^{あお}い天^{てん}だけ 残^{のこ}された。

しぐれ雨の後

——瀬戸海走る船の甲板にて——

しぐれ雨^{あめ}の

過ぎた後^{あと}、

静^{しず}かに

私^{わたし}は 甲板^{かんばん}の上^{うへ}で

秋の空

むかふの方から

風がきた

山も畑も 皆吹き飛された

野は みるまに 灰色になつた。

淋しく 残つた

褐色の木が

枝先を振はせ 何をか叫ぶ

あれ たちまち

ひら ひら ひら

沈む夕日

死線しせんを越こえて

我われは行ゆく

すぐめに召めされし

使命しめいに生いきて

四圍しゐの冷罵れいばに

目めもくれず

死線しせんを越こえて

我われは行ゆく。

沈む夕日ゆふひに

祈る。

低くたれた

雨雲の下に

赤くほでつた

西の空に

兒島半島の

紫の影が、錦繪のように

すき出して見える。

主よ、さようなら！

今日もまた

みめぐみを深く、

お禮申上げます。

ねじで とめられて

飾りも何もないプラツトホームに

『加古川 加古川』と

驛夫が 規則に縛られたような音諧を出して、

乾き切つた聲で呼んで居る。

みめぐみを

今日もたゝへて

我は生く。

プラットホームの音楽

乾いたプラットホームが

カラ／＼と鳴るよ！

灰色の四角に切つた
セメントの上に

下駄と靴の響——

黒くぬつた

柱の鐵が

しつかりと
セメントの上に

銀

の

IV

簪

銀の簪

——藪下正太郎兄夫妻のために——

花^{はな}びらまいて、

花^{はな}ふんで、

みまへに進^{すす}む

花^{はな}嫁^{よめ}御^ご

聖^{きよ}きみ堂^{だう}に、

咲^さく花^{はな}は、

若^{わか}き血^ち潮^{しほ}の

紅^にの
色^{いろ}。

きんく　　ぴか　く

金^{きん}屏^{びやうぶ}風^{ふう}。

あやにしき、

夢に出會ひし

乙女子の

胸に入りゆく、

人や誰れ？

あやめさく頃、

あやにしき、

錦欄緞子に、

色どられ、

果報みるもの、

人やたれ？

産れてのびて、

その色合いろあひに 映え添はそへて、
嫁御よめごの簪かんざし 揺ゆれました。

夢ゆめの世界せかいの

その奥おくの

寶たからの庫くらの窓まどガラス

そこから洩もれる

光ひかりのやうに

銀ぎんの簪かんざし ゆれました。

(一九二〇・二・九)

あやめ咲く頃

——林彦一氏の結婚を祝して——

あやめ咲く頃ころ、

港の啓示

のどかな都みやこの

私わたしの生活せいかつには

港みなとは 一ひとつの啓示けいしである。

混亂こんらんの演説會場えんぎくわいじやうにも、

威風堂々ゐふうだうだうたる示威運動じゐうんどうにも、

港みなとの打うちひらいたやうな

大おおきな啓示けいしは與あたへられない。

葦合あしあひの港みなとに

私わたしは下くだつて行ゆく――

花^{はな}さいて、

咲^さいて實^みのつた、

なでしこや。

互^{たがひ}に寄^よれよ

いつまでも

エデンの花^{はな}園^{どの}パラダイス

パツと咲^さいたる花^{はな}二^{ふた}つ

あやめ咲^さく頃^{ころ}、あやにしき。

あやめ咲^さく頃^{ころ}、あやにしき。

海岸には

砂礫と煉瓦をあげて居る

請願巡查派出所のあるあたりに

鐵のインゴット、ウキンチ十數臺、

石炭　そのほかの價あるものが

露天に曝らされて居る。

港には富が捨てられてある。

暇さうな　勞働者が　十五六人、

陸に引きあげた船の側で

暢氣に　あたりを見て居る。

炭俵を敷いて　寢込んで居るものもある。

防波堤の中は特別に急がしい。

帆船が　三四百隻も　這入つて居るであらう。

ウ牛ンチを乗せた

「馬力が二車軸を破損させて修繕して居る。

六七人の遅ましい男が、浅黄の張皮を着てそれを あれこれと いちつて居る。

スティム・パイプを乗せて 馬力が二つ、

海岸から来る。

曇り日に、

濡れ綿を干す女達、

五町六町に渡つて一面に、

印度綿を干して居る――

忙しさに 甲斐性よく、

朝疾うから夕遅くまで、

頭に手拭を置いて

縛がけに。

海に吐ける

下水を衛生人夫が

石の蓋をあげて

シヨウベルで掃除してゐる。

帆船から下ろした

砂利、煉瓦を幾十臺かの

馬力が運んでゐる。

港は静かに

秩序よく動いて行く。

夏の

曇りの日の

灰色に澄んだ

静かな海は

マストが 林はやしのやうに見える。

賑にぎやかな 青筒あせづいのランチから

勢いさばひよく 紫むらさきの烟けむりが立ち上のぼる。

沖おきの 獨逸どいつロイドの

青筒あせづいの 大おほきな 汽船きせんが

特別とくべつに 私わたしの 眼めをひく。

臨港りんこう鐵道てつどうの 貨物くわもつ列車れつしゃが

機關車きくわんしゃ二臺だいをつけて 走はしる。

川崎かはさき鍊鐵所れんてつじょの 三百尺しやうせきもあらうと思おもはれる

規則きそく正ただしく 並ならんだ

セメントの 大烟筒だいえんどうから

微かすかに 雲くものやうな 烟けむりが 出でる。

港みなとに 臨のぞんだ 赤煉瓦あかれんぐわの 倉庫さうこには

勢いさばひよく 仲仕なかしが 荷物にものを 運はこび 入いれて 居ゐる。

櫟くもぎの木きに、椋むぐに、

白樺しろかばに、

凡すべて大おおきな

信州しんしゅうの自然しぜんに、

慰なぐさめられて下ください。

神かみは愛あいです！

光ひかりです！

強つよく生いきて下ください、

神かみは愛あいです。

波をもたてず

板ガラスのように、沈黙してゐる――

(一九二〇・八・六)

知らざる友に

――肺病の――

慰められて下さい

冬の日に

アルプス越えて

来る春に。

白い雪に

すき通る空氣に

舞うてゐた。

白い直垂を着た人が

御神燈をつけてゐた。

御供物の側の御神燈の光は揺いだ。

御神前の板間で、

子供等が鬼ごつこをしてゐた。

みんな美しい顔をして笑つてゐた。

夕まぐれに 私は悲しい

思ひを抱いて、

公園の中に 忍び込んだ！

金澤の或る祭

金澤かなざはの町まちの子こらは

春祭はるまつりに 太鼓たいこを打うつてゐた。

お宮みやの前まえに

一文賣もんうりの駄菓だわし子屋やがならんでゐた。

うれしさうに

子供等こどもらが

あてものゝ籤くじをひく

お婆おばさんの ぐるりに 集あつまつてゐた。

お宮みやには、

幼兒をさごが神樂かぐらにつれて、

全能者 アブラハムの末を

遂に 救はず――

サレムの城壁 今 破る

泣け 泣け 女よ！

神の選びし民 今 滅ぶ！

萬軍の主の 住み給ふ宮、

今 燃ゆ！

Flight!

―― 飛び立てよ――

二つの水色の眼に 囚はれたる男よ、

エルサレムの滅亡

ネブカデネザル王 十九年五月七日

神の都 エルサレム 燃ゆ。

悔と 悲みと

嘆きと 涙の中に。

囚れし エルサレムの女

願み 願み 大聲に泣く。

『全能者 エホバの宮 今 燃ゆ』と。

北の手 遂に伸ぶ。

彼女かのぢよの手ての届とどく 三尺上じやくうへに！
紅べにの頬ほにすくまされたる者ものよ、
飛とび立たてよ！

哀 歌

迷まよひ行ゆく、

小羊こひつじを見みて下ください！

跛ちんぱの

牧者ひつじかみを見みて下ください！

歸かへりも出で來きず、

追付おひつきも得えせず、

逃げよ！

紅の頬に　すくまされたる者よ、

飛び立てよ！

罪より　にげよ！

女の魂の抱擁より　にげよ！

神は　Flight　だよ。

女の胸の心臓の鼓動、

乳の膨らみ　――

美しいあでやかな――

「永遠の偶像」！

されど……………

Flight！　飛び上れ

跳ね返せ！

一尺上に　二尺上に！

空は震ひ、

しとしと

雨は降る

あとも、さきも、

なにもわからぬ 盲目の、

跛の牧者の上に！

流すのか 漂はすのか、

それもわからないで 降りしきる細雨。

小さき胸のゲツセマネ！

神よ 小羊はどうなるのですか？

獅子ししの住すむ

荒野あれのに行ゆき惱なやんで居ゐる。

雨あめ——風かぜ

秋あきの空そらに

涙なみだを貯たくはへた革囊かばうろを肩かたに打掛うちかけ

嘆なげきに飽あいて

杖つゑがしら抱いだく悲かなしみの人ひと

髪かみかきむしり、

聲こゑなき小石こいしにかちりつき

あゝ主しゆよと呼よぶ——あてもなき祈いのり

胸むねの哀歌あいかに

結んで 醒めず。

嗚呼 墓よ、

野心と肉塊の靈は 何處ぞ？

聚樂の榮 消え、

桃山の輝きも 失せぬ……

去りたくなくて、

せめてはと 思ひ慄れ、

平安城の榮華、

下に見て 汝は埋る。

あゝ

此墓石、

阿彌陀山頭

——豊公の墓側に立ちて——

阿彌陀山頭あみたさんとう

風死かぜしして 木葉動このはうごかず、

人絶ひとたえて、

影騷かげさほがず。

暮れやすき

冬の日、平安の城を

光より奪ひ、

夢は永久に

時^{とき}は移^{うつ}り、

人^{ひと}は去^さる。

あゝ 凡^{すべ}てこれ

『時^{とき}』と『沈黙^{ちんもく}』の葬^{さう}列^{れつ}ぞ！

力と榮の名残………

されど、

冷たきを 如何にせん――

野心は生きたし、

人生は短かし、

石の命は

汝の野心なりしを。

露は都を包んで

一つ、二つ、光は、浮べる舟の

つたなき燈火と現る。

淋しき都よ！

V

我等が心燃えしに非ずや

我等が心燃えしに非ずや

——路加二十四章三十二節——

主亡^{しゆ}せて、

迷^{まよ}ひ　さまよふ

二人^{ふたり}の弟子^{でし}よ、

爾^{なん}曹^{じやう}の道^{みち}は

何地^{どこ}へぞ？

聞^きけ、

爾^{なん}曹^{じやう}の^{のち}後^ごに

靜^{じやう}けき　聲^{こゑ}音^{おと}す、

彼かれ、猶なほ、怪あやしむ、

『何事なにことぞや』

答こたへよシモン

『ナザレのイエスの事ことなり、

此人このひとは、神かみと萬民ばんみんの前まへにて

行おこなひと言ことばに

大なる預言者よげんしやなりしが、

祭司さいしの長をさと官吏等やくにんら、

彼かれを死罪しざいに、解わたして、

……十字架じしかに……

……釘くぎ……け……た……り……

今日けふは 彼葬かれはうむられてより、

見よ、

彼爾曹の傍を歩む。

彼爾曹が哀みの聲に

怪み問ふ――

『爾曹行つゝ

哀しみ議論ふは

何ぞ――』

クレオパよ 答へよ、

『爾はエルサレムの旅人にして、

ひとり、

此頃ありし事を、

知らざるか？

屍を見ず……………」

加へよ クレオパ——

『あゝ 我曹の『悶』は

之なり——

彼果して

『甦』——り『得』るか？』

見よ、見よ、

傍に立つ人の聲は高し、

『信ずる心の遅き、

愚なる者よ、

キリストは、

此等の難を受けて、

三日目なりしが……今朝、

或婦たち、

我儕を驚かせり、

彼等墓に行き、

イエスの屍を見ずして歸り、

天使現れて、

『彼甦れり』と、

言へるを見たるを告ぐ……

また、

我儕と共に居りし、

ペテロ、ヨハネも、

墓に走せ行きたるに、

婦の言へるが如く、

彼、爾曹を捨てゝ、

去る！

彼、爾曹を、

捨つ……信なき者よ！

彼は森影に、

消ゆ、

爾曹は心細く 彼を見送り、

旅舎の前に佇すむ、

日傾きて 暮近し、

思出多き此夕を如何？

果して 此宵

眼を閉ぢ得るか？

其光榮に入るべきに非ずや。

あゝ信ずる心の遅き、

愚なる者よ、

モーゼより凡の預言者を始め、

凡ての聖者は、

之に就て解明するに非ずや。』

あゝ信ずる心の遅き、

にぶき二人の弟子よ、

爾曹は猶、

信ぜず、

爾曹猶神を疑ふ、

噫

急ぎ 馳せつけて、

彼を 呼び返せ、

此淋しき 物憂き夕に、

ガラヤの昔 語り明せよ――

彼の聲 聞きて、

爾曹の心 燃えしに非ざるか？

彼は また 歸り來る、

彼 夕餉の席につく、

おい、愛すべき人よ！

彼は 何處の聖者ぞ？

彼 學者ならず、

權威ある者の如く話す、

あゝ淋しき 夕紅よ！

淋しき 夕紅！

過ぎにし 僅一歳の昔、

爾曹が有りしメシヤの

『夕紅の教訓』の思出や如何？

西―夕紅の中に歩む、

彼―解釋者の影を見よ！

靜かに 寂しく、

友もなく首垂れて歩む。

あゝ 爾曹、

彼の聲 聞きて、

心 燃えしに非ざるか？

其手……之れイエスの手に似すや。
此手而も釘の跡あり！

今爾曹は叫ぶ

『お、主よ我主よ……』

されど既に遅し

彼また居らず。

唯爾曹は顔を見合せて言ふ

『我曹の心燃えしに非ずや』

爾曹今何をなさんとするか？

信する心の遅き愚なる者よ——。

都みやこの人ひとにあらず、

ガリラヤの訛なまりあり、

あゝ 彼かれは 何處いづこの聖者せいじゃぞ？

彼かれ パンを取とり、

謝しやして擘さく、

その 沈しづめる 瞳ひとみ！

衰やとろへたる 指先ゆびさきの震ふるひ……

あゝ これ イエスの癖くせに似にずや。

彼かれ 皿さらを取とりて

爾曹なんぢらに與あたふ

みらるべき

若^{わか}ものは

静^{しづ}かに

祈^{いの}れる者^{もの}を

待^{まち}ち居^ゐたりき。

やがてまた、

赤^{あか}くこげたる

几帳^{きちやう}の蔭^{かげ}に

何^{なに}を祈^{いの}るか

隠^{かく}れ行^ゆく——その女^{をんな}——

聖^{せい}堂^{だう}の

法^み燈^{あかし}、

かすかに光^ひり、

十^{じふ}字^じ架^かの

浦上の聖堂にて

二人ふたりの信女等しんによらが

物思ものおもはしく、

つゝましく、

祈いのり居ゐたりき。

浦上うらかみの

聖像せいざうの前まへに。

白絹被しろぎぬかぶり

跪ひざまづきて――

一人ひとりの女をんなの

その弟おとうととも

廣やかなる

高く造られし

御堂の蔭に、

青く洩りくる

鈍き光波は

滑かなる板間に反射して

美しく輝やく。

二人の信女と青年と、

そして旅になやめる私は

静かに瞑想の中に

沈みゆく。

森の雀の

優しくも

鳴く聲は

イエスは

木像もぞうのまゝ沈黙ちんもくす。

我われもまた

二人ふたりの信女等しんによらの如ごとく

沈黙ちんもくのまゝ、

祈禱いのりと默想もくさうの中うちに、

涙なみだぐましく

數十分すうぶんを送りぬ――

聖堂せいだうの中うちにて。

『みめぐみの主しゆよ、

たえて かすかなる

みひかりにても、

與あたへたまへ

わが心こころにも。』

講師かうしの視線しせんに 遠慮えんりょして、
よそみも ようせず 樂書らくがきも出來できず、

まだらの黑板こくばんを みつめて、
無むと有うの切目きれめを瞑想めいさうする。

(欠呻あくび一ひとつして……………)

早くはや 鐘かねが
鳴なればいゝがなあ！

静かに我等の耳に入る。

私は猶も

跪座して

時に祈を刻む。

教場で

鐘が 早くなればよいが、

面白くない このレクチユア。

あくびの きれぎれ、

身體のたるみ、

わが身の躍る。

夕空に、アイヌの笹家
烟はく、秋の落葉に
映えてのどけし。

選挙の後

悲しき日よ、

街に出て

號外くばりに

會つたばかりに、

凡ての努力が

北海道

北^{きた}のはて 世^せ界^{かい}のはても
愛^{あい}しあらば 氷^{こほり}もとけよ
鎖^{くさり}も落^おちよ。

旭^{あさひがは}川 四^よつ^つの川^{かは}の

あつまりし

アイヌの里^{さと}に、榮^はゆる賑^{にぎ}はひ。

秋^{あき}の日^ひに 北^{きた}の國^{くに}空^{ぞら}

のどかなり すめる空^{くう}氣^きに

貧民窟の街路に
無意味に下駄が鳴るよ――

私は大阪を呪ふ
日本を……………

大阪に、

煙はあがつても、

自由は

あがらない！

あゝ 暗い！

日本は暗い！

大阪の煙は

無効むかうであると知しつた――

今井博士いまい はかせが

落おちた――

聲こゑを嘆なげらして

叫きけんだ幾いく十日にち

凡すべてそれが

無効むかうであつたのだ――

貧民ひんみんと

勞働者らうどうしゃは

救すくはれない！

乾かわき切きつた

始終考へ込んで、

鬱いでゐた、

卿等が――

どうしても

辛抱出来なくて、

立ち上つた、

その勇しさよ！

迫害も、困苦も、

嘆きも、悲哀も、

凡てを通り越して、

たゞ強く生きんとする、

猛者よ！

無意味に立ちのぼる

若き人の群よ

——新人會に捧ぐ——

たざり立つ

血潮を汲む、

若き人のむれよ、

卿等 新人よ！

人類の歴史を、

無意味に、

終らせたくないばかりに、

猶^{なほ} 十^じ字^じ架^かに

近^{ちか}ずかんとする

あゝ卿^{けい}等^ら、殉^{じゆん}教^{けう}者^{しや}よ！

帽^{ぼう}子^しを 取^とれ！

民^{みん}衆^{しゆ}よ

そこ

我^{われ}等^らの先^{せん}達^{だつ}が

行^いくではないか！

(一九一九・二・二八)

丹 波 栗

丹^{たん}波^は栗^{くり}！

新人よ！

卿等に、

自由あれ！

光明あれ！

私は 卿等を 今

涙で 見送る。

みよ、卿等の爲めに、

十字架が 待つて居る、

彼處に――

それでも、

卿等は、

虐げられたる靈と、

傷められたる葦の爲めに、

パチンとはじけた、

丹波栗！

丹波の山の

山奥で、

鬼が拾うた、

丹波栗！

秋の木の葉が

散つたのち、

ポツリと落ちた、

丹波栗！

今年　みのり

よいしるし

くり、くり、くり、くり

丹波栗。

かば色、とび色、

丹波栗！

色艶すぐれ、

實のみちて、

炭火で焼いて、

湯でゆでて、

お口にほゝばる、

丹波栗！

猿蟹戦争の

そのむかし、

こんろの炭火は あかく燃え

鐵の鑄型は ぬくもつた。

油を塗つて こなこねて

黒い鑄型に 粉こめて

よく／＼焼けるを 待つてゐた

街の子供も 待つてゐた。

向隣のやんちや小僧

向のやんちやの小僧さんが、

お母さまのおるすに

オイ、オイ、オイ、

山やまより出でて來きた、

丹波栗たんはごり！

山やまから出でてきた、

丹波栗たんはごり！

あん焼の阿爺さん

まちのはづれの 四辻よっつじに

貧乏びんぼうな白髪しらがの ぢいちゃんが、

臺だいつき車ぐるまに 店出みせだして

餡焼あんやき一つ 一錢せんで

まちの子供こどもに賣うつてゐた。

楊子江の屍

楊子江に

屍が流れて行く。

裸體のまゝ、

腐りはてゝ、

さびがついてゐる。

水の流るゝまゝに 早く

川下に流れて行く。

屍の側に 帆船が

走つて居たが

屍を拾ひ上げやうともせず、

まちの まんなかで

オイ、オイ、オイ、

けんくわに まけて

オイ、オイ、オイ、

お母^{かあ}さまに しかられ

オイ、オイ、オイ、

お灸^{きり}を すえられ

オイ、オイ、オイ、

のけものに せられて

オイ、オイ、オイ。

河南の平原

水の涸れた平原に

砂烟が立つ。

何百里か、

何千里か、

たゞ 茫漠たる平原を

一寸のすきだにゆるがせにせず

根氣よく 耕した

その勞力の貴しさ——安さ！

野驢馬が走る。

走り去る。

『夏は

毎航海 二つか 三つかの

屍に遭ひます』と、

二等運轉手が

私に教へてくれた。

屍は 下に 下に

流れて行く。

廣い毒々しい

黄ろい急流は

靜かに流れてゐる。

妖怪のやうに――

土塙は崩れ、

城壁は破れ、

山も 河も 凡て

疲れてゐる。

黄なく光る

黄河の顔――

すぐ思ひ出す 支那人の

黄ろい顔――

そして、

黄ろい

太陽が、

黄ない埃の立つ河南の

平原を射る。

羊牧者が佇む。

汽車に群がる、

放浪者——乞食——

苦力の大群が

無蓋車に乗せられて、

大平原の淋しい、

停車場に捨てられてある。

黍は一尺しかのびず、

稗は五寸しかのびないで

人間の努力に裏切る

今年の飢饉——？

幻まろしのやうに。

汽車は驛々に止つて、

無闇に客車を占領したがる

兵士の群の

灰色の姿が

睡むさうに蠢めいて居る。

夏の終りの

午後の日に――

『まだもう一ぺん

内亂があるのかなあ？』

汽車は烟を立て、

河南の平原を走る――

謎のやうに。

VI

街頭にて歌へる

勞働歌

目覺めよ、日本の勞働者！

過去の因襲　ふり落し、

世界改造　遂ぐるまで、

克己勉勵　努力せよ！

土耕ひ機械織り　船造り、

地の底くぐり　金を掘り、

汗を搾りて　パンをねる。

勞働者こそ　尊けれ！

闇に嘆ける　その聲を！
金權世界を　壓倒し、
正義人道　地を拂ひ、
貧しき者に　自由なく、
民は悲しく　影うすし！

——コーラス——

金もて自由を　縛らざる、
公義の天地　みんなために、
我は叫ばん　平等の、
選舉の權利　あたへよと！
選舉の自由　あたへよと！

君よ教へよ　三圓の

彼は朝に 霜を踏み、
夕べに 星をいたゞきて、
彼の家路に 急ぐまで、
人の爲にぞつくすなる！

目覺めよ 日本の勞働者、
過去の因襲 ふり落し、
世界改造 遂ぐるまで、
克己勉勵 努力せよ！

普通選舉の歌

——敵は幾萬の譜に合せて——

聞かずや、君よ、民衆の

金權世界の暴虐に、

暗雲ふかくたれこめて、

若葉は雨に咽ぶとも、

我等はいかで屈せんや。

暗きを破れ打破れ！

資本の砦打破れ！

光に目醒し我等こそ、

改造世界の柱なれ。

來れよ友よ列に入れ

改造氣運のみなぎりて

自由の雄叫び轟かし

今日こそ示せわが威力。

貨幣くわいに自由じゆうの 差違さあるか？
自由じゆうに金かねの 多寡たぐあるか？
正義せいぎは黄金こがねに 劣おとれるか？
金かねは人ひとより まされるか？
自由じゆうを蔑なみする 國立くにたつか？

労働祭の歌

——軍艦マーチの譜に合せて——

起たてよ 日本にほんの労働者らうどうしや、
目醒めさめよ 世界せかいの生産者せいさんしや、
今日けふこそ 我等われらが誇ほこりなる、
青葉あさばの 五月ごがつ一日いちじつぞ。

北に秀でし 六甲や、

鷹取山を 後にして、

須磨や明石の 浦づたひ、

神戸の港の 美はしき。

昔榮えし 福原や、

その名も清き 菊水の、

楠氏の名残 とうながに、

市民の胸に かほるなり。

港を開き 五十年、

昔ひなびし 村里も、

今は開化の 波よせて、

文明の花 とはに咲く。

祝福されし神戸

——神戸開港五十年祝歌——

神戸は　すぐれし開港場！

黄金の　波の打寄せて、

大船小船の　出入する、

東洋一の　よきみなと。

國の光は　貿易の、

その恩澤に　浴しつゝ、

世界の潮の　押しよする、

神戸は文化の　魁ぞ。

——コーラス——

立て振へ 労働者！

盛り築け、新社會！

自由の天地に 生きたため、

すゝめ いさましく！

我等は世界の、労働者！

安きをむさぼる、あて人の、

すべての墮落に、遠ざかり、

いそしみ、はげむなり。

我等が打振る、槌の音、

天地をゆるがす、其の響、

歌^{うた}へや歌^{うた}へ 聲^{こゑ}あげて、
愛^{あい}する郷土^{きやうど}の よき街^{まち}を、
祝^{いは}へや祝^{いは}へ もろともに、
神^{かみ}戸^への街^{まち}を 祝^{いは}ふべし。

(一九二一・三)

生産者の歌

——ジヨザフ・マーチの譜に合せて——

我^{われ}等^らは世^せ界^{かい}の 生^{せい}産^{さん}者^{しや}、
海^{うみ}にも山^{やま}にも みちあふる、
ゆたけきみのりは 誰^たがゆゑぞ。
われらのちからなる！

労働歌

山河も睡る

眞夜中に、

機械の前に

立つは誰ぞ？

神の如く

秀でたる、

雄々しき姿

何人ぞ？

或は山に

海に野に、

將たまた地下の

坑道に、

孜々營々と

いそしめる、

かのはらからは

何人ぞ？

やみ夜のとばり、打碎き、

あけぼの、呼びさませ！

我等が見守る、熔鑪、

燃えたつ鐵石、湯と熔かし、

移す鑄型に、人類を、

新らたに 鑄換ゆべし！

我等の手ぎはに、おちどなく、

我等の機械に、ゆるみなく

自治向上の、世の中を

きづけよ、とこしへに！

兒童愛護の歌

笑める子供こどもの

顔を見よ！

天てんの使つかひに

似たるかな、

絹きぬにもまさる

その膚はだに、

林檎りんごの色いろどり

美うつくはしや。

「兒童じどうは大人おとなの

父ちちなり」と、

詩人しじんの言葉ことば

君きみ知るか？

若返わかがへらんと

するものは、

兒童じどうの胸むねに

泉汲いづみくめ、

彼等ぞまこと

人類の、

いとも尊き

恩人ぞ！

都も鄙も

おしなべて、

つくりなせるは

彼等なり。

彼等は久しく

耐べども、

地下に潜める

蛟龍ぞ、

時こそ來れ、

光明の、

天空さして

雄飛する。

時こそ來れ

新進の、

自由の天地

切りひらき、

産業自治の

新世界、

世々とこしへに

うちたてよ。

若人^{わかうど}たちの

まどらいに、

生命^{いのち}ことほぐ

おたけびきこゆ、

血潮^{ちしほ}は湧^わくよ

若^{わか}き世^よに！

理^り想^{さう}の蔭^{かげ}に

いくる人^{ひと}、

聖^{きよ}き日^に本^{ほん}を

思^{おも}ふひと、

けがれし惑^{まど}ひ

うちしりぞけて、

凱歌^{がい}の中^{うち}に

すゝみゆく！

自^じ由^{いう}に愛^{あい}に

幻^{まぼろし}に、

變^{かは}る世^せ界^{かい}に

目^めをさまし、

國^{くに}を愛^{あい}する

おもひは凝^こりて、

山^{やま}をも海^{うみ}に

移^{うつ}すべし！

ひともし新あらたに
神かみの國くにをも
兒童じどう愛護あいごの
己おのれを救すくふ

生うまれずば、
見みざるなり。
精神せいしんは、
道みちなるぞ！

老おい朽くち腐くされし
子こ供どもの世せい紀きに
愛あいと平和へいわの
子こ供どもの胸むねに

世よをすてゝ、
よみがへれ！
みなもとは、
宿やどるなり。

(風さ波の譜)

深草村青年團々歌

都みやこの南みなみ

深草ふかくさの、

潮うしほの聲こゑは高たかくとも

血ち汐しほしたゝる十字架じゅうじかの

たましひなくて何なにかせん

いざ／＼唱うたへ若人わかしどよ

神かみの影追かげおふ神かみの子こよ

綠葉みどりばそよぐ校庭かうていに

神かみに生いく人幸ひとさちありと

誰が子ぞ酒杯に親しむは？

——『あゝ玉杯』の節——

一、太平洋たいへいように

波荒なみちれて

いざ／＼ 闘め

若人よ、

青葉に山に

照る月に、

恵や深き

深草の里、

光をとほに

かゞやかせ！

國爾の友の爲に

戸畑の原の健兒等よ！

理想を孕むイエスの子よ！

國爾の寮の片すみに、

祈れる君が影きよし。

世界に渦巻く改造の、

酒杯しゅはいの爲ためめに

彼倒かれたふる

四、

驕傲けうがう慢心まんしん

淫蕩いんたうの

酒杯しゅはいを仰あふぐ

人何處ひといつこ？

ローマは倒たふれ

ギリシヤうせ

酒色しゅしよくと共ともに

國亡くにぼろぶ

五、

忘わするな友ともよ

愛國あいこくの

思おもひの胸むねに

燃もゆる時とき

公義こうぎと自由じゆうを

さまたぐる

酒杯しゅはいぞ我等われらの

敵てきなるを

六、

いざ立たて友ともよ

公道こうだうの

大和島根やまとしまねの

民たみ立たて

風雲將に

迫るとき

誰が子ぞ

酒杯に親しみて

國の危難を

忘るゝは

誰が子ぞ

酒杯に親しみて

國の危難を

忘るゝは

折返

二、
國に敵あり

淫蕩の

酒色ぞ

民の髓に入る

正氣衰へ

仁義うせ

よろめく足に

地は揺ぐ

三、
榮華は空し

バビロンの

王者の末路

君みずや

彼が馬蹄に

世は屈し

VII

魂の分泌物

一日一詩

痴亂ちらんの酒色しゆしよくに
公義こうぎの世界せかいに

遠さとほかり
甦よみがへれ！

——一節を飛ばして歌ふもよし——

魂の分泌物

—

眞夜中に、私は

静かに歩み、

廣小路の上に瞬く星と

親しく語る、

その時——

ひとりあるき、

そのありがたさ！

うれしき日の
幾日か續く。

何にも考へず、

凡てを忘れた
その奥に、

み姿 忍ぶ、

み神の尊さ！

三

一刻でも 多く

坊やの顔を眺めて居りたい。

それが 吾子であることを忘れ、

それが性の産物であることを忘れ、

たゞ尊く

人に飽き

静寂を取り返す

そのうれしさ……

二

二階座敷の

八燭の電燈の

ほの暗き影に、

一人考へ入る夜の

如何に甘きことよ！

瞑想の甘きしたより

呑みほして、

闇に住む

五

わが子に 睡を與へよ、

その額に玉を結べ！

天の使も

彼の顔を見入るよ！

六

母の ねんねこ歌の

愛らしき響よ！

私の爲めに

繰り返してくれ！

妻よ、も一度、

私も おまへの子でありたい、

その前に跪拜する――

四

吾が子が

もの云はぬことの

如何に 壯嚴に見ゆることよ――

『坊や！』と呼べば、

答らしい 句調で、

たゞ

『オー、オー』と小さく呟く。

その聲の奥ゆかしさ！

すべての神祕は

語り得ぬところにある。

魂たましひの救すくひを

その名なは

ナタニエル

彼かれはイスラエルにて

最もも聖きよきものゝひとりなり！

麦の芽萌ゆる頃

麦むぎの芽め 萌もゆる頃ころ、

野のに出いでゝ、

生いのち命よみがへの甦はるる春はるをみる！

青せい緑りよくの若わか葉はが

そんな美しいおまへの歌がきけるなら
そんなにねんねこ歌の節が
美しく響くものなら――

無花果の下にて

祈れるものあり、
無花果の下にて。

そはイスラエルの中にて
最も聖きものゝひとり！

待てるものあり、

無花果の下にて。

民衆の解放と

萌えいづるよ、

彼處に 野に、

私は野路に立ち、

眼をあげて

生命の噴出するさまを見る。

私は靜に野路に立ち、

麥の若芽を默視する。

地殻を破つて生命が噴出する、

噴出する土に 野に。

土——樺色の土を破つて、
出て来るよ 力強く！

雪の下に、

嚴冬の寒氣にも打勝つて

いさぎよく、

青芽が吹出して来るよ。

あゝ 麥の若芽！

嚴冬を越えて、

雪を越えて、

地殻を破つて、

若芽が

おゝ 麥の若芽が、

風は過ぐ
地面をなめて。

土色 銀色、

灰色 鉛色、

太陽の下を、

風はとぶ。

道も、

野良も——麥の芽萌ゆる——

家も 荷車ひく人も、

今砂埃に、

埋められた——

颯 風

——川崎芳熊君に——

砂すなをあげて、
埃ほこりをまいて、
風かぜはとぶ。

青あをくうごかぬ、

大空おほぞらを、

地ちを震ふはせて、

かぜはとぶ。

ひゆうと

車窓沈思

武藏野の

かすみ行く、

夕ぐれに、

やみに消え行く

森蔭をしのび、

八王寺行の

汽車の窓にもたれて、

静かに私は

たけゆく夏の日を思ふ。

桑畑も 稲田も、

波なみのやうに、

うちよせる、

はやてに

人ひとは息いきもせず、

眼めを閉とぢて、

立たち止どまる。

ひゆうくと、

家々いえの戸とを

ゆるがせて、

風かぜはふく。

地ちは騒さわがしう

どよめきわめく。

谷、山川、虫の音、

そして ぼんやり

黄色に照る月は

燥烟の下で 買へぬ平和を與へてくれる。

谷の上を行く

小さい武蔵野の汽車が、

美しい岡を越えて、

曠野を驀進する。

まだ 日本は平和だ！

瓦の沙漠大阪

大阪の朝

レールの側の哩標も、

靜かに野趣を示して、

ステーションにも、

淀かな言葉につくせぬ

平和な空氣が流れてゐる。

線路工夫も、

サラリーマンも、

ゆつくりと一日の業を終へて、

田舎の家に歸り行く、

うれしさうな姿を見送つて

私は平和な日本を思ふ。

プロレタリアの悲哀があるとも、

猶田舎には、

萬金で買へぬ平和がある。

町まちを行ゆく

下駄げだの音おとは、

寒空さむぞらに冴さえて

カラン カラン と鳴なる。

高見たかみから見みると、

瓦かはらの沙漠さばくのやうにみえる。

大阪おほさかに

私わたしは、マホメツト教徒けうとのやうに、

朝あさの禮拜らいはいを

神かみに捧ささげよう、

あゝ、瓦かはらの沙漠さばく！

瓦かはらの沙漠さばく！

瓦かはらの沙漠さばくの上に

瓦屋根に！

美しく光る

朝の光――

電線を通して

黒ずんだ空、

静かに

明け行く……

大阪の朝！

近所の

小學校に、

子供の

わめきの聲が

きこえる。

阿里山森林にて

登^{のぼ}り來^きて

山^{やま}と木^こ立^{たち}に 迎^{むか}へられ、

うれしまぎれに 雲^{くも}と踊^{おど}れり。

三^み抱^かへも 四^よ抱^かへもある、

檜^かの木^きに、

われ木^きなりせばと憧^{あこが}れけるかな。

木^きの精^{せい}と、

化^{くわ}して み山^{やま}に 獨^{ひと}り住^すまば、

太陽たいやうが昇のぼる……。

鹿兒島

美うつくしき街まち、

青葉あをば繁しげる。

南みなみの市し、

海うみは輝かがやき、

櫻島さくらじまは光ひかり、

太陽たいやうもまた、

此市このしを愛あいする。

南みなみの市し、

鹿兒島かごしま！

霧吹きて 雨を降らすよ、

山の精 その通力の、

我に通へる。

登り来て 新高山に、

近ければ われ自らを、

高しと 思へり。

山にくれば 無生の精の、

みな叫ぶ、

誰も 咎むる ものゝなければ。

千年へし 森の中にも、

我行かん 世の癒し得ぬ、

人のそしりも受けざらましを。

山の精　木の精

雲の精と化して　こだまとなりて、
谷に響かん。

十八里　み山の奥に、

馳け入れば　われは生けるを、
奇しく思ひぬ。

山深し　森も林も、

いと深し　椎の木蔭に、

暫し　祈らん。

夕暮に、

山を下りて貧民窟に、

自由を捨て、

泣くために、

また降りて行く

霜とけの途。

(大正七・一二・六)

ヂヤンケンホイ

君故に　ヂヤンケンホイで

宿さだめ

一夜まどろむ、み知らぬ里に。

(大正七年十月二十一日池田にて)

傷抱きつゝ。

株ばかり 打捨てられし
はかなさに 我は山路を
寂しく思へり。

阿里山の 石も林も、
みな叫ぶ 我は木となり、
自由叫ばん。

夕 暮

悲しき日よ、

魂と かたらひ、

幽間の 世界に、

首 うなだれ、

我は 行く。

たゞ 静かなる

魂の たよりに、

うれしき よすがの

おとづれをきく。

魂の鏡の、

薄ぐもりに、

わが神の 映り給へる。

待合室

待合室に、

幾日か、

待つ日のつゞきし。

くらやみを、

歩く

心地して、

幾月か 読むこともなく、

夢に 合ひし、

疾風じつぷうの如ごとく。

私わたしの祈いのりはそこにある。

私わたしは静しずかに 帽ぼうし子しを取とつて、

駛走しそうの中うちに在います、

神かみに祈いのる――

何人なんびとも私わたしが祈いのつてゐることを知しるまい。

私わたしは目めを閉とぢてもゐない、

首くびを垂たれてもゐない、

たゞ 暗黙あんもくの中うちに、

わが神かみに祈いのる。

颶風ぐふうよりも怖おそろしく、

地震ちしんよりも物凄ものよこき、

そのよろめきの中うちに、

わが神かみは 私わたしに充みち給たまふ――

急行電車の祈

慌たゞしき 駛行の中にも

祈はある。

暴風の歩みの中に――

機械の轟きの中に――

電線の響きに――

車輪の回轉に、

神は在す。

――私の祈はそこにある――

車は走る――

野を越え 谷を渡り、

わが生せい存ぞんに、なほ

わが神かみへの祈いのりがある。

急行電車きふかうでんしゃよ、行ゆけよ、

血ちの色いろに塗ぬられた鐵橋てつけちうを越こえ、

青田あをたに映うつる美うつくしき空そらの下したを行ゆけ、

松林まつばやしも 雜木林ざふきばやしも、

凡すべてが急行電車きふかうでんしゃの

駛走しそうに卷まき込こまれる。

眩めまぐるしい駛走しそうに、

山やまも、木きも、青空あをぞらも凡すべて踊をどる――

――電車でんしゃが止とまつた！

之これが私わたしの神かみへの祈いのりである――

僅かばかりの軌道の上に、

思ひもつかない、

不思議な力をかりて、

私の急行電車は行く――

三十哩、六十哩――

私の電車は暴風の速さを以て走る、

殆ど夢の中を走るかのやうに、

私の車は空間と距離を無視して走る、

私の電車は旋風の中を駆け廻はつてゐる……

旋風は私の頭脳の中に起る

私の脳底の旋風に

私の電車は巻き上げられた。

車は私の脳底を駆け廻る

それほど　たよりない

十四年前の我に

再び歸りぬ

涙多き 今日此頃

汽車は出る

「此客車は

五號車であります

皆様 急行券を

お改め願ひます……」

「べんたう！ 鯛すし！

牛乳！ 新聞！ 新聞！

涙多き此頃

何となく、

辛らき涙の 流るゝよ。

荒都を出でゝ、

三十日。

廢跡の思ひ出に、

わが同胞の 慘苦に、

救ひ得ぬ嘆きと、

救はんとする美しき心と、

災厄に打勝たんとする強き努力に、

わが涙のひとり流るゝ、

「さよなら！」

「どうも有難う御座りました」

靜かに汽車が迂り出る。

ブラツトフオームに下駄の音が鳴る。カラコロ、カラコロ！

汽關車のスチームが

勢強く空氣を震動させ、

レールがゴトゴトと吁鳴る。

赤い色や 青い色の、

信號燈が窓の外をよぎる。

向の客が

煙草の火をつける。

女學生が金絲鳥のやうに囀づる。

向側の窓に凭つた

お茶！

——「お茶二つおくれ！」

乗客のさわめき、

女學生の若き會話、

客車の通路を

ゴム雪駄でする音！

「辨當！ 辨當！」

牛乳！ 牛乳！

大きな音の濁つた鈴が鳴る。

「ピリくくくピリ」

汽笛の聲！

「ヤッ！」

見送り客と送る人——

あしたの電燈

心地よく寝た

白いベッドを離れ、

黄金色に彩られた、

硝子窓の

むかふの古枝をすかして、

眺めながら、

ほの暗い

室に立ちすくんで、

黙禱する。

腕をのべて、

頭の禿げた男が

新聞を読み始める。

外は闇だ、

天井の電燈はほの暗い！

私は頬杖ついて

居睡りの用意をする。

午後九時五分下ノ開發の

上り三等特急が進行を始めた！

朝のよろこび

強く雨の降る日、
白く障子が光る、
静かに青く、
朝が明けて行く。

二疊の室が銀色に光る。
蒲團も壁も、
鮮かに色づけられ、
障子を明けて、
空を見れば

スイツチをひねると、

書き散らした、

白紙と書物に、散る

白金の光は、

ぼかされて見える。

椅子にもたれて

色から 色へ

眼を移して見てゐると、やがてまた、

スチームの暖氣を感じる。

アメリカの朝は、

美しいと思ふ。

小溝こみぞの流ながれ

渦卷うずまきし、

濁にごれる水みづに、

小笹こささおち、

吸すはれるやうに、

流ながされ行ゆくを、

ちつと 眺ながめゐる

自じ分の心こころ

激動げきどうの

同盟どうめい罷工ひこうの翌日よくじつ――

何なんとはなしに

涙なみだぐまるゝよ、

おゝ 小笹こささの運命うんめいよ！

小笹こささの運命うんめいよ！

（近江八幡にて大電争議の翌日）

空^{そら}ははてしもなく
灰色^{はいろ}に輝^{かがや}く。

ちつとして寂^{しづ}かに

雨^{あま}垂^{たれ}の音^{おん}樂^{がく}を外^{そと}に聞^きく

秋^{あき}の細^{ほそ}長^{なが}い雨^{あめ}

「A」調^{てう}のマイナア、キイだ。

爭議の翌日

雨^{あめ}ふる日^ひ、

さみだれの、

(大正八・一〇・二三)

オフキイスにて

高い天井——青羅紗のかゝつた大きな机、

黒檀の算盤、

麻布のかゝつた椅子——廻轉椅子、

すりがらすから透いてくる鈍い光——

テーブル・telefon

海綿の這入つたベンふき——

不景氣風で商況は静かだ……

廣い事務所は心地がよい、
悠然と人間が賣買をする。

電線の燕

三羽の燕が

とまつた――

町から町に

引張つた

細い

電燈の

はりがねに、

夏の初めの朝に――

一羽がとんだら

みなとんだ。

油を塗つた

リノリウムが

鈍く光る

絶望の淵より

悲しみの井戸には 汲んでも底がない。

狂ひ死にするものゝ嘆きを思ふと、

天を呪ひたくなる。

が、起ち上りも得ないで、

打倒れたる絶望の淵にこそ、

新しき生命の 芽生もあれ！

何處で餘剩價值が発生するか分らぬ。

何にしても、

動いてゐるのを見ると面白い。

ボーイが走る。

女給仕が電話口に走る。

何處に金が動いて居るか知らぬが

静かな忙しさがある、

大正九年の暮の

店は静かなものだ。

大阪の

薄夕暮が

オフキスに押かけてくる。

床に敷いた

奇蹟

「それが 信ぜられませんか？」

「私は 信じます——」

凡てに奇蹟があることを。

一つとして、

みこころの儘ならざるなく、

一つとして、

みゆるしなくして、

地におちざるを——」

立ち上れよ、絶望の魂よ！
生命のある間、

燃え盡すが善い！

涙にも虹ぞ映る。

困苦の中にも聖劇はある。
いざ立て、絶望の魂よ！

一步前へね、一步前へ！

VIII

夕闇の春日の鹿

夕闇の春日の鹿

青草の

奈良の春日の

森の中に、

コ、とつぶ

鹿守は。

夕闇ふんで

駆けまはる、

斜にふる、

さみだれに。

天平の精靈

——奈良に残つた推古佛——

奈良に残つた

推古佛の表現の面持。

細くやさしい、

虚空藏菩薩、

もすそもやはらかに、

羅をひいて、

生くるが如く物語る。

飾つた姿でないが、

ほんとに慕はしく思はれる。

私の木綿の洋服がいよつぱりぬれた。

悲しい鹿呼ぶ聲が

遠くに消える

—— あゝ私をも、

そして私の多くの

貧民窟の友人をも、

あんなに呼び集めてくれる

人があれば善いになア！

この寂しい夕、

闇の雨の夜に——

大天井の頂

——日本アルプスの歌——

青空を、越えて星にも 近きかな、

大天井の 峯の頂、

夢さめて 燕岳の 御光來、

その美を我は 猶夢と思へり。

青空に 近き燕の峯の上に、

晝寢を我は うれしく思へり。

いつまで見て居ても、

猶飽き足らぬみすがたは、

母の情けの權化とも見ゆる、

その御形のおごそかさ、

線のきさみの　なだらかさ、

表現の姿の美しさ、

天平の榮華　外にして、

簡素な姿の　なつかしや。

榮華の誇の　けはひもなく

たゞ忍ばるゝ

そのしとやかなる　おもゝち。

富士もまた 淺間も 槍も 立山も、
凡て眼に入る 大天井の頂だいてんじやう いんすき

槍が岳 呼べば答へん 燕の
その頂きに 我は眠れり。

衛士のごと 凡ての峯の その上に
大槍岳は ひとり 威張れり。

山に居れば 様も姿も なかりけり
樵夫のごとく 我は装ひぬ。

時しあれば 飛驒山脈を 一筋に
飛ばまほしけれ 雷鳥のごと。

祈りつゝ 峯より峯に さすらひぬ、
貧民窟の 路次を行くごと。

アルプスの 峯に泊れば 小屋守は、
夜中に 讚美歌 高く歌へり。

山にあれば 憂きも 涙もあらざりき
我は歩めり 仙人のごと。

全世界 ひろしと云へど アルプスの
峯より見れば いと狭きかな

うれしさに 此處に半日 居りたしと
我は叫べり 大天井の頂き。

間斷なく廻す。

長いリズムで歌ひつゝ、

廻る川船の曳子の姿が、

何處へか消え失せた後――

淺瀬のせゝらぎの音のみ

耳朶をうつ。

三抱も、四抱もあらうと思はれる

岸に聳ゆる棕の木は、

このあたりの主である。

對對の渚には、

白馬が草を食うてゐる。

銀色の雲が 金魚のやうに、

空に浮ぶ。

焦土の東京に疲れた、

柿の葉の落つる頃

——備前の國吉井川のほとりに立ちて——

演説會場を抜け出て、私は

秋日に輝く、

吉井川のほとりに立つ。

和氣の山々は緑をなし、

大空はコバルトの光を放つ。

柿の葉は落の、

石だゝみの上に落ち、

大きな水車は、

吾むすわくを、

手を急がしく動かし、

洗ひ了つて、

石段に登つて歸つて行く。

取残された自分は、

石段に腰をおろし、

河底の、

エメラルドに彫刻したやうな、

美しい石の配置に、

眺め入る。

柿の葉が なほも

一つ、二つ、

私の頭をかすめて、

右に飛ぶ――

私は――

吉井川の清流に、

云ひ知れぬ、

自然の美を感じる。

――自然は残酷ではないのだ

――人間が間違つてゐるのだ

さう私は、

橋を渡る自轉車の影が

對岸に消えるまで、

見詰めながら考へた。

柿の葉が風に揺られて、

バサ／＼と落ちてくる。

鍋を洗ふ一人の女房が、

流れの中で、

富士よわがみの奥に立て！

(一九二四・九・一九)

ペルリ提督記念碑の下にて

久里濱の、

怒濤さかまく岸邊——

提督ペルリは

最初の一步を、

日本に印した。

それが 今から七十一年前の

七月十四日であつた。

孤立せる富士

太平洋に聳え立つ、

富士の高嶺のしたはしき

波間遙かに沈み行く

母國の影の美はしさ！

孤立に泣く日胸底に

忍ぶは、冬の夕まぐれ、

焔に燃ゆる

富士の山

むら雲越えて、

ひとり立つ、

ペルリの砲聲に、

日本の夢は破られ、

七十一年後の今日

日本は新しき日本として

彼の國に對峙する――

太平洋の波は、ゆれにゆれ

吼えたぐる雷か、

荒れ狂ふ龍の如く

久里濱の海岸を揺がす――

日蔭さへなき

こゝ久里濱の、

ペルリの記念碑の下に立ちて

私は靜かに、瞑禱する。

その日はむし暑かつたらう。

今日七月十一日に、

私はヘルメットをかぶり、

暑氣の爲めに

眼もあけられぬ、

まばゆさを思へば

ペルリの日本着の日が忍ばれる――

黒船を見て

幕府はびつくりしたのだらう

船をこんなへんびにつかせて、

それでお江戸と交渉させたと云ふのだから。

然しなにゝしても 大きな變動であつたに違ひない――

海は青くあるべく

磯を白く――

血の色に變らしめされ

慈悲の父

わが神――

憩なき人生に、

なほ、争鬭を續け、

血をもて血を洗ふ、

いやしき心を

贖はせ給へ――

あゝ、太平洋の波は

なほ、荒れ狂ふ――

『願はくは大能の神——』

太平洋を越えて

二つの國を

結ばせ給へ！

おゝ、日本は

排日の屈辱に

萬斛の涙をしぼらざるべからざるも

なほ、神——わが神よ！

汝の妙なる力もて

パロの心を碎き給へ——

太平洋をして

永遠に太平洋たらしめ給へ、

永遠に神の言葉を讀まず。

ペルリは來り、ペルリは去り、
此處に一塊の石くれのみ残る。

電車の響

——大阪北濱の眼病院の三階にて——

幾日か、

幾日か、

レールの響に、

驚かされて、

私の睡が打破られた。

主よ、いつ大海に

なぎを與へ給ふか――

米國を挫き

その高慢ををり、

日本を教へ、

その驕傲を

碎き給へ――

自然は永遠に波濤をして

語らしめ――

砂地に

永遠の形象文字を畫く。

人は來り、人は去る。

而も彼は

沈黙がつづく。

そうかと思ふてゐると、

また音響が烈しくなる。

大海の怒濤にも似やらず、

工場の響も似ない……

瀧の音には、水の音楽がある。

然しあの響に、

音楽があるであらうか？

—— あれ、また、

鳴るよ——

レールが、修繕を要する、

車體の各部が。

ナットがゆるいか？

組立が悪いのか？

喧しい 虚偽の文明に、

何か美しい響があるか？

あゝ また電車が鳴る！

電車が吁鳴る！

あの響を

何に譬へると善いだらう？ それを、

暴風にたとへることが

出来るだらう……

それ、喧しい、

颯風が來襲して來た、

そして、今、

また吹き止んだ。

三秒……四秒……

雑音のオーケストラよ！

——電車よ——

夜の空は静かだ。

仁丹の廣告の瞬きも止んで、

荷車の柔かい響きもやんだ。

あゝ、それなのに

街の暴風はまだ続く、

もう、静謐に歸つたかと思ふと、

またやつてくる、

暴風よ、

暴風よ、

人造の都會の

人造の暴風よ！

軋きしる音おとより、

鳴なる音おとが烈はげしい！

鈴すずのやうに鳴なる部分ぶぶんがある、

槌つづみを叩たたつやうなところもある、

上じやう下げに車體しやたいが震動しんどうするとみえて

スプリングが弾はじける音おとがする、

電車でんしゃの音おとは

大きな雑音ざつおんのオーケストラだ、

弾はじけよ！

鳴なれよ！

叩たたけよ！

軋きしれ！

おまへ――

私わたしの枕元まくらもとを走はしる

そして 今 いま 心に、

静謐 せいひつの氣 きが漲 みなぎることによつて、

私の眼 めを開 ひらき給 たまうた！

私は わたしまた 魂 たましひの上 うへに、

北斗星 ほくとせいが昇 のぼるのを見 みる！

おゝ エリコの途 みちを、

弟子達 でしたちが 諫止 かんしするの きも聞 きかないで、

『我 われに光 ひかりを與 あたへよ！』と、

叫 さけびつゞけた

バルトロマイのやうに、

私は わたし 光 ひかりを求 もとめて走 はしつた！

そして 見 みよ、

私 わたしに 光 ひかりが與 あたへられたではないか！

光の優しき掌

悦んでくれ！

友よ、

私の視力が回復して來た。

それは 恰も、

雪線の上に、

春の太陽が 歸つて來たやうに。

私に 光が與へられた。

あゝ 何と云ふ尊い光よ！

神は私に 光を奇蹟として教へる爲めに

私の眼を閉ぢた！

こんなものが光線を反射するかと、

疑はれる滑かな瀬戸物、

それらが不思議な形と色とで、

私に歸つて來た！

おゝ 友よ、

悦んでくれ！

私はまた書物を読むことが出来るのだ。

七ヶ月も捨てた

書齋に、

私はまた歸つて來た。

私は書齋を離れて、

魂の放浪に、

瞑想の闇路を歩んでゐたが、

八月の太陽が――

烈日の輝きが――

虹が――

凡ての實在の輝きとラチエーションが
私にまた歸つて來たではないか――

光が恐ろしくて

暗室に逃げ込んだ私が

また光を恐れなくなつた。

私は炎天を恐れず　私は、

街上を歩く、

光が珍らしいのだ！

光が　珍らしい！

キラ／＼　光る電柱、

瓦屋根、眞鍮の棒、

光よ！

珍客よ！

私を捨てないでくれ！

私の生命のながらうるあひだ、

あなたを愛する故に、

私の魂の客として、

私の眼に、魂に、

客人として止つて居てくれ！

おゝ久々に會ふた 光線よ、客よ！

あゝ

光線は、

太陽は、

電燈の火は……

私にまた 光が歸つて來た――

おゝ 光！ 光！ 光！

私の如く 其奇蹟を知るものは何人だ！

私に 活字が讀め出した。

日本字が 英字が 獨逸字が！

あゝ 思想の糸のつなぎ目が、

見え出した！

光よ、私の眼を愛撫し

私の眼の扉を開き

その上にかゝげた、

薄い幕を掲げ、

再び紅彩の圓窓より、

舞踊の足どりで

這入つて來てくれた。

繁く張られた

網膜の上で、

踊つてくれ！

輕業なりとも、

何なりと

君の望むが儘に

亂舞してくれ、

落つる心配は無い、

網膜が下に、

張られてある、

光よ！

此上は、強く、

私の眼の中で
踊つてくれ！

私の眼を愛撫してくれた、

その小さい 優しい細い掌が、

私の瞼に觸れたが故に、

私の瞼は上に開いた！

眼を開いてくれたものは、

光だ！

入れよ 光！

愛らしき 光よ 入れ！

私は おまへによつて、

また新しき大きな世界を

回復した！

いざ 光の君よ、

私の眼底の、

神経節の上で、

大工の手を借りずに、私と弟と青年達が建てた

北澤のバラック小屋

(前方の家は計費三十六圓)

私は此の一篇を私の眼の爲めに誠意もて努力して下した醫學博士有澤潤氏に捧ぐ。

(一九二三・七・二七)



(前巻の采女指舞三十六圖)

非 躰 の ん る る 小 屋

大工の毛ぶ番とて、
舞を染を清平義は集りて

IX

定^{ぢやうざい}濟^{ざい}屋^やの
算^{さん}司^し

その灰燼の悲しみに

降る雨に、

家うつ風に、

床を蹴つて立ち、

その隣人の爲めに患ふ

その心――

特權階級の多くが、

錦の床に、

夢まどかなる頃、

選ばれたるものなればとて、

その小羊の爲めに、

私はそれを默視しつゝ、

涙の頬の上を傳ふのを覺えた。

彼等は愉快氣に歌ふ。

着てゐる着物も、

みな小薩張してゐる。

トラララ、トラララ

凱旋の歌節面白く、

彼等は歌ふ。

去年の秋、

焼トタンのバラツクに、

彼等の冬を心配して、

幾千枚かの衣類夜具を配給したその日と比較すれば、

復興は彼等の顔に顯れてゐるではないか。

私の涙は感謝の涙であつた。

憂厄の手より救はれ

呪の的より脱れぬ。

あゝいとし子よ、

誰が汝の胸に

その清き魂を植ゑしぞ？

我もまた汝の如く

清く澄む靈の

あらまほし——おゝ人の子よ

十字街頭に立ちて

旗行列の児供が通るよ。

手に手に 日の丸の旗を持つて、うれしげに過ぎ行く。

汝等の苦痛はもう癒されたか？

私はそれを見て心より神に感謝する、

打振れよ旭日旗！

その光を世に示せ！

汝の手に太陽ぞ登る。

たとひ世界が闇であつても、

太陽をおまへの手より登らしめよ！

神は勝利の神ではないか？

あゝ、私はうれしい、

既に人生の絶えざる戦に疲れたるものには、

疲れざる之等の若き息子、

娘等ありて、

われ等の爲めに、

猶踊り且舞ふ。

神はかくも 早く、

日本を廻らせ給ひしかと思ふて、

涙を禁ずることを得なかつた。

兒供は過ぎ行く、

歌の節面白く。

快活に爪先に立つて、

踊るが如く進み行く。

去年の秋、私が心配してゐた、榮養不良はもう忘れられたかの如く

うれしげに輝ける顔もて兒供等は過ぎ行く。

黄色人種なるが故に、米國人に排斥せられても、

その排斥も、氣にせざる如く、

わが愛する兒供等は、

私の前を過ぎ行く。

快活なる兒供等よ、

——その間に私は隅の
電信柱に倚つて 黙想する。

三年越の

經木あみの海水帽を被つた男が

私と反對の方向に倚りかゝる。

自働車のガソリンの濁音、

廣告紙のちらばつた跡、

荷馬車——人力車——脚絆の人間、

その間に一人立つて居るのは、

四個の白熱燈をつけた

電車のポールだ。

電車は凡てすゞなりだ。

米國赤十字の軍人が

勇ましい姿で行く。

進すすみ行ゆけよ、

兒こ供ども等らよ、

復ふく興こうの爲ために、

若わかき日ひの爲ために舞まへ！

私わたしの眼めに涙なみだが流ながれる、

私わたしは復ふく興こうの力ちからを　兒こ供どもの輝かがやける顔かほに見みた。

日比谷の十字路

リン、リン、リン、

夕刊賣ゆふかんうりの鈴りんがなる。

濁にごった自働車じどうしゃの

ふきつゝける笛ふえ、

東京會館も

今は凡て

煉瓦の塊だ。

凡ては土の變化したものだ。

静寂が 私の胸に充つる。

その日には 長き衣服を着て、

歩いたものは誰も無かつたではないか！

江戸の娘よ、

平穩が取り返されたとは云へ、

あまりに おまへの扮装は、

場違ひだ。

深川には まだトタン屋根の下で

蒲團さへなき幾萬の魂があるに――

それを忘れて 綺麗をきる

乙女よ ハイカラの男よ

びろろと服の眼鏡をかけた

支那美人が二人、

停留所前をうろろする。

颯風の去つた後の

ちぎれ雲が空を蔽ふ。

乗換の電車を探ねて人々が

狂ひとまどふ。

くる電車もくる電車も満員だ。

電車の両側に人々がぶら下る。

私は電車まつ間を黙想に送る。

日比谷の十字路にも

静けさがある。

警視廳も、帝國劇場も、

こちらの人も、

仕末せねばならぬ。

若き日に 病みし頃は、

薄命をかこち乍らも、

自分ひとりであつた。

今では幾名か 十幾名かを、

養はねばならず、

嵩み行く、

借金を眺めつゝも、

助く可き人のことも思ひ、

あちらの講演と、

こちらの講演を断つて、

自分の逃げ道を設け、

おまへには第二の九月一日が
必要であらう！

祭の太鼓の消えた後

甲州街道を行く

肥え車が、

微かに東に消え行くころ、

蟲のすだく聲と、

自らの

微かな歔咽にきゝ入る。

あのテントも たゞまねばならず、

秋の夜の二時

祭の最後の太鼓も消え

睡られぬ夜のつゞけば、

ひとり 神とのみ

眞夜中を過す日の多き。

あゝ娘等は歌ふ

あゝ 娘等は歌ふ

我は 歌もなく、

焦土に さまよひつゝあるひまに、

都の娘は 歌ひつゝあり！

(一九二四・九・二五)

この月の同志のパンは、

どうして 作つて行かう？ と、

また 涙の中に

計劃を立てる。

ほの暗き

電燈の下――

腎臓炎で

無理とは 知りつゝも、

また 眞夜中に

蹴起して

筆を走らせる

涙が漂ふ 机の上を漂ふ――

それは私の耳のけがれよ、

管絃樂の凡てを止めよ、

生命の神聖は

彼等の爲めに　けがさる！

沈黙は更に　彼等の叫びより、

音楽的なり――

沈黙をして　わが音楽ならしめよ！

日本に

涙ある日に――　嘆きの日に。

われは歌ひ得ず

樂しみ得ず――

われは萬斛の涙もて、

彼女(かのう)は綺羅(きら)を飾(かざ)り、

頬(ほ)に紅(べに)をぬり、

その若(わか)き日(ひ)を歌(うた)ふ！

喉(のど)を自慢(じまん)するものあり、

生命(せいめい)に感激(かんげき)もなく、

たゞ美(うつく)しき聲(こゑ)を誇(たか)る驚(おどろ)よ 小鳥(こどり)よ――

われ等(ら)の歌(うた)は 今(いま)少し大(おほ)きく、

今(いま)少し 悲痛(ひつう)なり。

そは張(は)り上(あ)げられたる聲(こゑ)を

ひくめ能(あた)はざる感激(かんげき)の聲(こゑ)ぞ――

あゝ 低(ひく)くおちた、

あの楸(く)の聲(こゑ)を持(も)つ女(をんな)の聲(こゑ)をとめてくれ！

前途ぜんとを憂うれふ——友ともよ——

定濟屋の簞笥

コトカタ、コトカタ

バタ／＼、バタバタ、

ほがらかな 秋あきの空そらに、

彼かれの歩あゆみを彫ほり行ゆく

定濟屋ちやうさいやの簞笥たんすの

街まちを行ゆく！

再またび病やむ日ひの 長ながいだけ、

たゞ わが國の、

低められし日に もださん――

娘よ わが爲めに

魂の歌を唱へ――

救のため

黎明を呼びさませ――

あゝ 彼女は媚びを民衆に賣る！

日本の闇は深し―― 明るき日に。

彼等は白日の闇に、

迷ふ！

黎明は何時ぞ―― わが魂の爲めに？、

われは わが國士の

バラツクの病床びやうしやうに

枕まくらを低ひくくして 寝ねてゐると

裏筋うしすぢより 響ひびきくる

定濟屋ぢやうさいやの

簞笥たんすのひゞき！

急いそぎも得えず、

遅おそれも得えず、

かけることも出で来きず 飛とび上あがりも得えず、

重おもければ踊をどらず 輕かるければ打うたず、

彈力だんりよくある竿さそのしわる儘ままに、

はね上あがる鐵てつのひきての

鳴なりをどる儘ままに、

歩あるけば 踊をどり、

踊をどれば鳴なる、

細^{ほそ}り行^ゆく自^じ分^{ぶん}を眺^{なが}め、

他^た愛^{あい}もな^なく　ひとり泣^なく　再^{ふた}び病^やむ日^ひ。

一^{ねん}年^よ餘^{じう}日^{にち}　働^{はたら}いた、

そ^{はうしやう}の報^{ほう}償^{しょう}に　病^{やまひ}を^え得^えた！

コトカタ　コトカタ、

バタバタ　バタバタ、

彈^{だん}力^{りよく}性^{せい}あ^ある　竿^さが、

擔^{にな}は^はれ歩^{あゆ}む度^{たび}毎^{ごと}に振^{しん}動^{どう}し、

鐵^{てつ}のひ^ひき^きて^てが簞^{たん}笥^すのひ^ひき出^だしに、

は^{おと}ね^ねか^かへ^へる音^{おと}！

コトカタ　バタ／＼、

聲は出す、

灼熱の暑き日に、

彼の叫ぶべき喉笛の代りに、

箏笛のひきては、

重荷の上に踊りつゞけて、

コトカタ カトカタ、

バタバタ くくと、

拍子面白く 跳れば、

彼もその拍子につれられて、

大名の如く、

悠然として 大道に、

鐵片の踊の歩をきざむ！

コトカタ コトカタ、

その箆笥たんすのひゞきに、

せきたてられて、

定濟屋ちやうじいやは重荷おもを擔こふ！

ほがらかなる秋あきの朝あさに、

定濟屋ちやうじいやの箆笥たんすはなるよ！

そを　ほこりがに、

彼は單調たんてうなるリズムを立たてゝ、

路次ろじを出いで行ゆく！

コトカタ　コトカタ、

バタ／＼　バタ／＼、

目めをとちて忍しのべば、

擔にへる人ひとの　汗あせに泌にじむ姿すがたの見みゆ、

呼よびたくも、

X

太陽を胎んだか 日本の娘よ？

バタバタ　バタバタ、

秋の朝　定濟屋の簞笥ぞ、

街を歩く！

人生の重荷を背負はせられ、

鐵引手の踊る儘に。

（本所松倉町のバラックに病む日）

太陽を胎んだか 日本の娘よ？

——大正十三年を送るに當つて——

大震災の餘燼のほとぼりも、
いつしか消えた。

一月十五日の強震は

焼け残りの山手の夢を驚かせた。

然し それも思つた程の被害もなくしてすんだ。

そして自ら檻に閉ぢ込めた

日本の小さい孔雀は、

またそこから出て來た。

わが西の同胞はそれを忘れて、

黄金の鎖に自ら装ふとは、

大阪の正月はやはりお目出度かつたに違ひない。

東京へ賣込みに急がしかつたらう！

然し 本所のバラツクに、

私は七五三を吊した家を

一軒も見たことがなかつた。

七五三を賣りに來るものがなかつたのだ。

『灘』は生酒を造るに急がしかつた。

そして その國難の日本に

最も多く賣れたものは

酒ではなかつたか！

酒！ 酒よ

『まア何と云ふ意氣な姿だらう』と、
見返るやうな姿は 東京に見えなくなつて反つて地方に甦つた。

あいつの胸をふん掴んで、

金紗の羽織を溝の中に叩き込み、

錦の帯をすた／＼に裂いてやりたいと、

私は毎月阪神地方に歸る度に、

何度思つたか知れない！

大阪には地は揺らなかつた、

それは私も知つてゐる、

然し 何といふ無慈悲なことだらう、

十萬の同胞がまだ汚衣襤褸にくるまつてゐるときに、

自ら災厄に遭はざる故に、

そして 狂奔する

この亡國的色彩調を帯びたる この日本男子の危機に

わが愛する日本の娘は

どれだけの忠告をしてくれたか？

あゝ 私は彼等があまりに弱いことを悲しむ。

臨時議會に

公娼廢止の建議案が出た。

その調印を街頭に求めた。

そして調印したものは

労働者であつて

貴婦人ではなかつた。

貴婦人は旦那の爲めに

公娼が必要だと思つたのか

おまへはこの貧乏な日本が、

おまへの爲めに正氣を失つてゐることを笑つてゐよう。

私はその聲が聞える

この國は一年十四億の豫算を

よう立てないで、

四萬五千の腰辨を首切ると云ふ。

それでも國民は

十三億七千七百萬圓（大正十一年）の酒を呑み干すことを忘れない。

おゝ 汝の狂へる乾杯辭よ！

國を舉げて さうだ、國をあげて

おまへの爲めに乾杯すると

灘の正宗が喜んでゐる。

國は亡びても 酒は呑む。

粗衣粗食そいそしょくは一種しゆの誇りであつた。

そして 健忘性けんはうしやうのわが首都しよとの婦人ふじんは

その勳章くんしやうを自ら褫奪ちだつした。

それ故にわが美しき同胞どうほうよ！

婦人參政權ふじんさんせいけんは君等きみらより逃げて行く

然し またそれを要求えうきうしてゐる日本婦人にほんふじんが

一體たいに日本人ほんじんの中に何人なんにんあるであらうか？

ピカデリーの硝子窓がらすまどを打壊うちこはす前に、

ロイド・ジョーヂは英國婦人えいこくふじんの爲ためめに

參政權さんせいけんを與あたへなかつた。

加藤高明かとうかうめいには勿論もちろん、その準備じゆんびが無い。

そして日本婦人にほんふじんを熱愛ねつあいし尊敬そんけいすることに於おて

何人なんびとにも劣おとらない 私わたしにも、

自みづかからの地位ちゐがあまり高たかく、

署名しよめいの爲ためめに、

前半身ぜんはんしんを屈かどめることがあまり

勿體無もったいないと思おもつたのか……

それが故ゆゑに 汝なんぢの階級かいきふは

永遠えいゑんに侮辱ぶじよくされてゐる。

あゝ わが貴婦人きふじんよ！

汝自身なんぢしんが一種しゆの金かねにて買かはれたる

奴隸どれいたることを思おもへば、

汝なんぢの友人いうじんのために

一行ぎやうの署名位しよめいくらいは出来できたらうものを、

わが卑怯ひけふなる貴婦人きふじんよ！

震災當時しんさいたうじに

沸騰點を突破せよ！

わが愛する天照大神の直孫等よ！

神功皇后の孫娘よ！

非常時には、非常時の熱度が要る。

ヴェルダンの包圍を破るには

ペタン將軍の自動車が必要であつた。

それは一時間百二十哩の快走力を持つて走つた。

餘震は、銚子の沖に消えた。

然し、魂の餘震は

まだ打續いてゐる。

あゝ、わが友、わが親愛なる娘らよ！

英國の娘等は

四百萬の男子が

それと與へる用意をして居らぬ——
何故か？ 何故か？……

寒暖計に刻まれたる溫度が

地球の溫度ではない。

平常時の熱度だけ出して居れば

平常時の用事は片付くかも知れない。

然し 沸騰する熱湯の爲めに、

體溫器を持つて行つてはならない。

水平線を突破して、

過去の凡ての因襲と

傳統とより解放される爲めには

百二十度の寒暖計では足りない。

おまへの 靴下の底に金鎚を秘めよ！

銀座の天賞堂のサンプル・ボツクスのダイヤモンドの値が、何千圓附いて居ようが

それがおまへの解放に何の役に立つか？

わが愛する姉妹よ！

銀座が焼けても

おまへの解放が来なかつたではないか！

婦人洋服が

おまへを解放するのでは無い！

裾さばきが善くとも、

癩病人の膿が怖しくては

解放は来ない！

熱度を高めよ！

凡て戦線に立つた時に、

汽車と電車と 自動車と 運轉させた。

その勳功として

國民は彼等に參政權を與へた。

然し わが光明皇后の曾孫は

癪病人の膿を吸ふことを忘れて了つた。

それで國民は彼等に王妃の席を拒む！

寒暖計のガラスを打碎けよ！

日出づる國の若き娘等よ！

六千度の 天照らす太陽の熱度を保て！

魂にとつて 銀座の裝飾窓のガラスがなぜ惜しいのだ？

それを打破れ！

踊り出せよ！

標本箱の中から

婦人（ふじん）をサンプルボックスから解放（かいほう）してくれるのは彼等（かれら）だ。

彼等（かれら）はよもや

吉原（よしかわ）遊廊（いうわく）の櫓子（れんじ）窓（まど）に

龜井戸（かめいど）私娼窟（ししやうくつ）の覗（のぞ）き窓（まど）に

堪（た）へ得（う）る人種（じんしゆ）では無（な）い！

あまりに強（つよ）い光明（くわうみやう）が彼等（かれら）の胸（むね）を包（つ）む。

黒潮（くろしほ）が彼等（かれら）の胸（むね）に湧（わ）く。

彼等（かれら）こそ

震災地（しんさいち）に自動車（じどうしゃ）を運轉（うんてん）し、

家（いへ）を建（た）てる人種（じんしゆ）である。

あゝ頼母（たの）母（も）しい婦人（ふじん）らよと、

彼等（かれら）の活躍（くわつやく）に感激（かんげき）の涙（なみだ）を流（なが）したのであつた。

然（しか）し 彼等（かれら）が

あまりに冷靜なるわが箱入娘よ！

震災當時 私わたしは一人の女運轉手をんなうんてんしゆを見た！

それはどれだけ私わたしを悦よろこばせたことか。

私は 大正十一年の夏、

大阪の市立の運動場で、

水泳の女選手をんなせんしゆの活躍くわつやくを見た。

彼等われらの骨組ほねぐみ 彼等かれらの肉付にくつき

そして彼等かれらの勇躍ゆうやく！

波なみを切る具合ぐあひ 拔手ぬきてを切る按配あんばい

その一舉手一投足きよしゆとうそくが、私わたしをして悦よろこばしめた！

『黎明れいめいが來た！ 遂つひに日本にほんにも黎明れいめいが來た』と

私はひとり私わたしの魂たましひに叫さけんだ！

飾箱なまきりばこの裝飾さうしよくガラスを破やぶり、

G 學院の生徒は自由でなかつた。

光明皇后の孫娘として、

育て上げられてゐる筈のわが娘等は

羅災者の爲めに蒲團の荷車が曳けぬ、

家庭の小鳥として飼はれてゐるのであつた。

あゝ 舊き人よ去れよ！

癡病人の爲めに膿を吸ひ、

羅災者のために、荷車を曳くことを肯んぜざる凡ての人は死ぬ！

私は 彼を

我國女性の典型的光明皇后の名によつて耻ぢる！

民は興らず

國は榮えず

絃歌に神樂坂は磨き

世界に乗り出してくるまでには

未だ十年かゝる。

それまで あゝ それまで、

まだ十年の長きを私は待たねばならぬのか！

あゝ 待たるゝ十年よ！

震災直後 G 學院の小娘等は

私の爲めに

蒲團の荷車を引張つてくれた。

その時——私は彼等に婦人參政權を與へたかつた。

或新聞がそれを寫眞にして出した。

翌日、H 子さんはそれを心配して

『あんな寫眞が出ると

うちの學校に入學が減るかも知れぬ』と私に云ふた。

その言葉は私をして悲しましめた。

何人が 狂奔してくれるのだ！

あまりに 研究の日が長い！

我等はもうページの上の解放に飽いた。

あゝ再び 私をして繰返させてくれ。

体温器の細管を打碎いてくれ！

わが姉妹よ 美しき日本の娘よ！

太陽の熱度は 攝氏四十五度では測れない！

メートルを出せ！

熱度を加へよ！

汝のあげ潮は何時ぞや？

あゝ 太陽は昇るではないか？

おまへは何をしてゐるのか 日本の娘よ！

英も 米も 獨も 白も みな婦人參政權を得たではないか！

玉の井の淫賣窟は 青年で埋まる。

その日 その時

わが淨き女性は何と考へつゝあるか？

夏は去り、秋は來た。

薄の穂はひらき

そして霜はもう近い。

そして我等は未だ救はれない。

百萬の若き女工は 工場の寄宿に幽閉され、

七萬の女坑夫は 地下千尺の所に石炭を掘る。

何のためにか？

あゝ 果して何の爲めにか？

労働組合を口にするものはある。

然し 婦人労働組合の爲めに

然し 魂は？ おゝ肝心な

おまへの魂は何處へ預けて來たか？

厨川白村の「近代戀愛觀」をおまへは何と讀んだ？

その何ページに

肉慾の爲めに異性に近づけと書いてある？

日本の娘よ 魂の爲めに

戀愛の有ることを覺えてくれよ

魂の爲めだよ

もう一度繰返して云ふ 魂の爲めだよ！

『舌』と云ふことを覺えてくれ！

汝の魂は一つしか無いのだよ！

それを分轄して與へてはならないよ！

ガソリンが足らなければ 飛行機は飛べない！

魂を分轄するなよ

光明皇后の孫娘は何をして居るか！

汝の家の鴨居が高過ぎるのか？

否 汝の脛があまりに短か過ぎる。

それ故に 棚のものは汝の手に這入らないのか？

わが娘は 巧妙なる髪結び方を知る。

二百三高地は女優髻となり

女優髻は甲虫と

蝶々の如き髪へと進化した。

鬢は帆の如く 元どりは牛の糞の如く

頬紅豊かに 眉墨濃く

外出には髪網を忘れぬやうになつた。

女學生は 袴の裾を短かくし

洋服のスカート流に着衣することを忘れない。

あまりに彼等のだらしなさが眼につく！

北極に 南極に

彼等の子孫が盛えるには

彼等の裾はあまり開き過ぎてゐる！

汝の寢床より蹶起せよ！

東雲はその眼瞼をパチつかせてゐるではないか！

勇躍せよ 日本の女性よ！

富士の高きより昇天する「かぐや姫」よ 勇躍せよ

日本の半分の人が泥酔して

國の精神的、經濟的災厄を忘るゝ日に

おまへまでが狂亂してゐてはいかぬ！

天照らす女神の曾孫等よ

光明皇后の直系よ

いや私の云ふのは

おまへは おまへ自らを偽つてはいけないうと云ふのだ！

戀もして居らないのに戀を装ひ

愛して居らない癖に

男を弄ぶことをやめてくれ！

戀愛は遊戲ではないのだ

『否』と云ふことを覚えてくれ！

そこに汝の『然り』がある！

東京に来て 私はあまり多くの離婚と

あまりに多くの女性の失敗を聞かされた

日本女の帯はあまりに早く解け易い！

彼等の爲めに固く下帯を締めてやれ！

勇躍するためには

XI

日よ歩みを止めよ

——日本を外に

太陽^{たいやう}を胎^{はら}んだか？
新^{あた}しき日本^{にほん}は おまへの胎^{はら}に宿^{やど}つたか？

日よ歩みを止めよ！

——ハワイの友を歌ふ——

ハワイの島に、

朝日は、

早くも昇り、

椰子の林に、

山鳩の鳴く

燃え立つ焰の如く

紅のハイビスカスは

私の血を踊らしめる。

農園に、

しほれぬ中に、

おゝ

わが友は

忙しく

いそしむよ――

太平洋の真中、

飛魚の躍るほとり、

パロト・フキシユのさまよう岸に、

極樂鳥は舞ひ、

キラウエアの火口は踊る、

貧しくとも、

悲しみを知らざる

日出づる國の同胞は、

光榮の爲めに

街頭に、

見よ、わが友は

早やくも

立ち出でて

労働の爲めに

いそしみつゝあるではないか！

空は高く、

海は緑に、

光は眩く、

凡ては、

恵みに充つ、――

朝露の

消えぬ間に、

椰子の葉先の

歩みを止めよ！

日の子等は

汝を見上げて

静かに微笑む。

(一九二四・一二・八　ホノルルにて)

静かに東雲ぞ瞬く

——ホノルルの街に——

何と云ふ美しい曙だらう！

澄み切つた空に、

まだ満月が残つてゐる。

町には鶏の聲が満ちて、

立つ――

南風競ふ日、

わが友は、

靜かに、

青葉の上に

瞑想す。

太平洋の波は

彼等の夢を醒まさず、

彼等は

白日の光榮を浴びて、

勞働の力強さに、

自ら歡喜す。

日よ、

わが友の上に

窓側まどがはに立つて

ホノルルの街まちを祝福しゆくふくする。

おゝ主しゅよ！

太平洋たいへいやうに泰平たいへいを残のこし給たまへ！

日本にほんの多くおほの魂たましひに、

安やすしかなる生命いのちの道みちを興おこへ！

自みづから放擲ほうてきせざる

恩めぐみの光ひかりを示しめし給たまへ！

ハイビスカスの輝かがやきを、

彼等かれらの魂たましひに植うえ、

十字架じしかの血ちもて、

彼等かれらを贖あがなひ給たまへ。

アーメン、アーメン！

鶏鳴けいめいの聲こゑと共に、

椰子やしの森もりを通して、

こだまが餘音よいんを残のこし

丘をみの上に立たてる

小屋こやに響ひびいてくる。

街まちの灯ひは

まだ消きえないで、

螢火ほたるびの如ごとく見みえる。

冷ひややかなる微風そよかぜが

冥想めいさうせる私わたしの

頬ほを撫なでる。

南みなみの國くにの曙あけぼのが

私わたしを静しずかなる

祈いのりに導みちびく。

私わたしは眼めをあけた儘まま、

まごろみ得ぬ月夜

あゝ私は見た 桃色のペールに包まれた、
フキリビノの娘等が 階段の片隅に
米の配給を待つてゐるのを。

私はすぐ思ひ出した 過ぎし日、

五萬の労働者と 共に泣いたことを……

女等は坐板の上に蹲つて、

ものうく膝頭を見詰めてゐる、でも、

子供だけは小薩張と 着物をきて

廊下をあちこち あるき廻る。

この祈をみまへに捧ぐ。

太平洋の主、わが主よ、

空は今や、

薄紫に變り行く。

いま、朝日が

地平線に、

殿のいで立ちをしてゐるらし、

靜かに、靜かに、

ホノルルの街に、

東雲が瞬く。

おゝ主よ、

わが魂に。

光を 光を！

あゝ私わたしはみた 南みなみの國くにの娘等むすめらが
飢うえ疲つかれたる瘦そう軀くを運はこび、

洗は足あしの儘まま――

砂糖さとうの都みやこホノルルに

米こめの配はきふ給たまを待ちつゝある光景くわうけいを。

あゝ私わたしはみた、私わたしはみた！

太平洋たいへいやうの眞中まんなかに

血ちの噴火山ふんくわざんのあることを！

私わたしの夢ゆめは破やぶれ、

骨ほねはうづく、

まどろみ得えぬ、

月夜つきよの眞夜中まよなかに。

『ヒロには野天に何千人位寝てゐるのですか？』

『サア、四五千人も寝てゐますかな、

そこでは、もう子供が三十六人死にましたそして大人は十八人

今日明日の内に

病院から十人位抛り出されるのです。

資本家は一年に一億五千萬弗の

砂糖を收穫し、

四割の配當をしてゐるに、

我等は一日一弗の生活をしてゐます。

罷工は八ヶ月と十日續きました。

然し戦は之からです』

さう眼に涙をたゝえて

マンラビットは云ふた。

メンデルゾーンの Contemplation

あゝ 涙^{なみだ}をもて きく、

メンデルゾーンよ——

乙女^{をとめ}児^こが練習^{れんしゆ}の

おまへの曲^{きよく}

喧噪^{けんさう}より 静思^{せいし}に、

静思^{せいし}より 冥想^{めいさう}に、

私^{わたし}を導^{みちび}く……

おゝ Contemplation——

アメリカの Naz に飽^あき、

うみ疲^{つか}れたる Fox Trot に惱^{なや}まされつゝある私^{わたし}に、

丘かみの上うへから 私わたしは

晴はれ渡わたる銀色ぎんいろの港みなとをながめ、

白しろきベツドに懊惱おうちやうしつゝ、

愛あいらしき比島ひたうの娘等むすめらの、

今宵こよひ、固かたき路ろ上じやうの

結むすばざる夢ゆめを思おもふ。

涙なみだが祈いのりを誘さそふ。

寂さびしき月つきが

私わたしの顔かほを覗のぞく――

(一九二四・一二・九、ホノルルにて)

騒がしき文明に、

ガソリンに、砲弾に

犯罪の報告を賣る新聞に、

おゝ わが神――

Fox trot は

何處に迷ひつゝあるか――

大洋を渡る日に、

祈りを忘れ、

踊りつゝ、

波の上に、

性慾に悩む、

アメリカ人の悲しき姿よ！

主よ――

わが爲めに

おまへの曲きよくの滑なめらしかなることよ――

迷まよひに、迷まよひし、

大森だいりん林より引出ひきだされ、

大海たいかいの漂たぎひより靜しづかなる港みなとに

伴ともなひ入れられたること、

わが宿ふどの

乙女をとめ兒の彈だんずる、

おまへの靜思せいしの曲きよくに、

私は涙なみだをもちて Contemplation に歸かへる！

あゝ 靜思せいしを追おはれたる

アメリカ人じんの爲ためめに

わが涙なみだは流ながる――

あゝ 悲かなしき追放ついほう――

甘あまき靜思せいしより追おはれ

おゝ 戦はずとも、すむ可きものを、

何百萬の血を、

流すことを教ふるジンゴーに、

汝の靜思を教へ給へ！

わが神、聖思の源よ――

ひるは光もて、我等を蔽ひ、

夜は靜思もて

我を導き給へ。

おゝ Contemplation の神よ、

Oriental の Orient ！――

み光の主――

凡ての喧噪を越え

靜かにみ胸によらせ給へ――

アーメン、アーメン――

靜思せいしの日ひを與あたへ給たまへ。

もだし難がたき

惱なやみの日ひ――

あい憎そのつきたる

文化ぶんくわの夕ゆふ――

おゝ主しゆよ、

わが爲ために靜思せいしを備そなへ給たまへ！

止とまる可べき日ひに

止とまることを知しり、

考かんふ可べき日ひに

考かんふ可べきことを教をしへ給たまへ。

靜しづかなる東洋とうやうをして

われらの行ゆく可べき道みちの

最終さいしゆの標的へうてきを考かんへさせ給たまへ！

—— 遠くに

ダンスのザズが聞こえる

今日壁畫にみた

あの武裝せる兵士に

守られた フランシスカンの僧侶。

そして、今宵きくザズ・バンド、

私はあまりの幻滅に 涙ぐましく そこに佇立した。

それではイエス様 おやすみ！

—— キリストの像に ——

壁間の

片隅に立つ

ミツシヨン・ホテルにて

——リザ・サイドにて——

粗造^{そざう}な煉瓦^{れんぐわ}を

積み上げた、

くすぶれる爐邊^{ろへん}に立ちて、

私は^{わたし} 昔^{むかし}のミツシヨン^{ミツシヨン}を

瞑想^{めいさう}する。

文明^{ぶんめい}より、遠く離れ^{とほはな}れ、

納朴^{なつぽく}な中世^{ちゆうせい}に

私は^{わたし} 歸つて行く^{かへりゆく}。

最初から

あなたを

見上げてゐます！

トガを

まくしあげた

あなたが、

今にも

そのうつろから

出て來られる

ようで、

うれしくて なりませぬ。

私も

こんな お姿が

キリストの像さうの

優しく立たつことよ！

今宵こよひ

私の枕邊まくらべを

守り給たまへ！

青石あをいしの

うつろの中なかに、

据すえられた

小さき

キリストの像さうよ！

私はわたし

室へやに這入はいつた

また明日あすの朝あさ

お目めにかゝりませう

風呂ふろから出でて來きました。

イエス様さま、

私わたしは鏡台きやうだいの前まえに

立たつて

また、

あなたのお姿すがたを

顧かへりみます。

それでは

イエス様さま

おやすみ！

一つ 嬉しいと

思ひます。

イエス様、

私はこれから、

風呂に

這入つて寝ます。

風呂に

這入る間

わかれるのが

惜しいように

思ひます！

では イエスさま、

わが爲めに、

インペリアルヴァレーの

詩を歌へ！

わが兄弟は

涙で土を軟けて

種をまく。

そこに

日本人の種が生える

インペリアルヴァレーは

魂を持つ

土より魂が

インペリアル・ヴァレーは魂を持つ――

茫漠たる平原に、

わが兄弟は

涙で土を潤しつゝ

重き鋏を

そこに打込む。

涙で固められた土は

魂を持つ

インペリアル・ヴァレーは

魂を持つ！

私の魂はうなだれる。

彼の偉大なる胸は

奴隷解放の爲めに苦しむ。

その戦の爲めに傷きし、

若者の爲めに傷む。

我にもまた同じ涙を與へよ、

歐洲の大戦に兄弟は傷き、

人種争鬭のひがみに――

凡ての胸は膿む。

そして此國は排日に日も足らず、あゝ――

我にリンコルの涙を與へよ！

彼の名の爲めに、

今日も奴隷を解放せよ！

彼の涙の故に――

(ワシントンにて)

踊り出す！

涙の精が踊り出す！

インペリアル・ヴァレーは

魂を持つ――

リンコルンの涙の故に

リンコルンの涙の故に、

私に魂の聲をきかせてくれ！

リンコルンの記念塔の中に、

私はぬかづき、

彼の静かなる、

沈思の姿に、

わが魂には、

凡て無意味なる、

人間のうめき！

無用なる刺戟！

盲目なるあこがれのために、

大ニューヨークは出来上がる。

あゝ刺戟の交響樂、

ニューヨーク！

ニューヨーク！

私は瞑目の中に、

その凡てを否定し去る。

紐育も、

私の魂には、

たゞ一塊の、

刺戟の交響樂

ニユーヨークの

繁榮を外にし

眼病む身の

病床に、

靜かなる

無聲の音樂

耳底に響く！

さわがしき、

地下鐵道のうなりも、

絶えざる市内の騒音も、

港は美しく、

薄がすみ――

ハドソン川のほとり、

ジャジー・シチーぞけむる。

さらば ニューヨーク　さらば！

友よ　さらば　さらば！

私に取つては、

土くれに等しき、

ニューヨークよ　さらば！

狂人の都よ　さらば！

速力と廻轉戸の

ニューヨークよ　さらば！

毒薬と天の使の錯綜せる街よ、さらば！

霧の日に　ニューヨークを去ることは

土くれのみ！

あゝ、

ニユーヨーク！

ニユーヨーク！

(一九二五・二・一〇)

ニユーヨークよ、さらば！

ニユーヨークは

霧の中に、

ニユーヨークは

霧の中に沈む。

春雨ふる模様する。

太西洋の波の上に踊るもの

たそがれに

雲低く、

南はくらく、

風は北、

甲板に、

ひとり たゝずめば、

讃美歌の

おのづから、口よりもるゝ。

波のうちよする律動にあはせ、

私は歌ふ……

善いことである――

この街を霧の中に捨ておけ！

光線に　さらすは

あまりに　耻かし！

ニユーヨーク、さらば、さらば！

一日として　楽しまざりし

ニユーヨークよ　さらば！

日本娘の友情に包まれ、

日本の爲めに憤激せし、

ニユーヨークよ　さらば！

胸に踊るものは、
波の上にも踊る――
夕闇は近し、
灯は漸く明るし――
いざ眼を閉ぢて、
今日を守り給ひし
神に祈らん。
波も歌へ
わが主を　わが神を。――

(一九二五・三・一五)

「天の力に

いやし得ぬ

悲しみは

地にあらじ」

上に下に、

右に左に、

舟は揺ぐ。

私は たしかなる、

あしどりもて、

波の上を踊りまわる。

太平洋も

私にとりては

神の一滴のみ！

海も私の胸より廣くはあらじ。

世界に 精氣絶ゆるとき、
愛もて歌へ 再生を！
再び 教へよ 十字架を！
波の上も 救あり！
希望に 燃ゆる 旭かげ
東の國より 輝かせ！

(一九二五・三・一八)

何故我を涙の爲めに造りしか――

創造主は
何故 我を涙の爲めに造りしか？
そんなに 涙脆く、

東に住むもの歌を持つ

あゝ 我等

東ひがしに住すむもの

歌うたを持もつ。

神かみの爲ために 歌うたを持もつ。

波なみの爲ために 歌うたを持もつ。

自由じゆうの爲ために 歌うたを持もつ。

日出ひいづる國くには 歌うたを得えよ。

星ほしも 光ひかりも 歌うたを得えよ。

凡すべての喉のどよ 鳴なりどよめ！

生命いのちの爲ために 鳴なりひゞけ！

讀みては泣き、

感じては泣き、

若き日また歸り來りぬ。

地球の悩む日

受難の日に、

我は生れぬ、

西半球が

血潮に染まりし日に

我は生れぬ。

贖ひ得ば贖ふ可きを。

贖ふ可くあまりに穢れたれば、

贖ひ得ると誓ひし、

ナザレの聖者の餘光だに拜し、

その足跡だに踏まばやと、

そんなに 多感に 造られしか――

悪事を聞くに慣れたる我は。

少しの善事を聞く毎に

涙ぐむよ。

有難くもあるかな、

救のみ手、

未だ地上より亡びずと

思はるゝ そのうれしさに

自然流るゝ 感激の涙

人に隠して

立ち上れば

我とわが身がおかしくなりぬ。

此頃の 我が涙、

年老いて 子供の如く、

家庭を破壊するからいやだと云ふ」と
老宣教師は 顔をも曇らさずに語りぬ。
有難きことよ――

アメリカにも

この偉大なる精神あればこそと、

たゞ たゞ その有難さに ぬかづきぬ。

國を捨て 家を捨て、

世界を贖はんと、

出で立つ人の 如何に 勝れたることよ！

我もまた 彼等の跡をふみ、

國をも 家をも捨て、

贖の途を歩まんかな――

醜しき涙、

見らるゝ耻しさに、

胸の底に巡禮者の札をかけ、

十字架の途上に登れば、

求道者に會ふ度毎にうれしくあるよ。

今日も 船中の浮世話に

西部アフリカのウンナンドウに

傳道する老宣教師の物語きゝぬ。

父はセイロンの宣教師にて、

自分は黒人の爲めにアフリカの宣教師なりと云ふ――

アフリカの爲めに 既に奉公すること、

四十六年、一八八〇年にそこに

年若くして赴任せしと云ふ。

「我子も 宣教師に赴かずやと、

問へば 宣教師の仕事は、

塔のおもみで

柱にひびが入つたのぢやないか？――

ひびの間より

新しき精神よ湧き出でよ！

英國の爲めに

十字架の爲めに――

セント・パウロの塔の上

セント・パウロの

塔の上

光つてみえます、

テームスが。

密室に籠りて、
涙を そと 拭きぬ
狂へるまゝ――

(ロンドンにつく日 一九二五・三・二〇)

セント・パウロの Cathedral にと

カシドラルの中に

鐘の音がする。

塔のおもみで、

柱にひびが這入つたと云ふ。

それで修繕を急いでゐるのだ。

歐洲のキリスト教も

狭い塔が

震ひます。

塔に上れば

ロンドンが、

いやになります！

人間も――

歴史の足跡

グラツドストーンの

石碑の上に、

私は立ちすくむ。

大英國の血の爲めに、

烟けむつてみえます、

ロンドン市し！

高たかい響ひびきが、

きこえます、

烟けむりのロンドン、

おそろしや！

地獄ぢごくのように、

響ひびきます！

なぜにこんなに、

かしましく、

こんなところに、

生きてるか？

風かぜが吹ふきます、

北風きたかぜが！

足音——足音

歴史の上を歩む

足音——足音

それが私の耳に

きこえる——

(一九二五・三・二一 ウエストミンスターアベイ)

クロムエルの銅像の前にて

ウエストミンスターの

霧の中に

静かに瞑目して

クロムエルは立つ。

靜かなる祈を捧げよ！

その血の贖の爲めに、

そのきよめに、

沈黙の中に人は去り、

人は行く。

祈の中に入り行く。

私もまた沈黙の中に、

涙ぐむ——

靜かに魂が過去より

私に呼びかける——

靜かに靜かに

足音の音が、

瞑目する私の耳に

きこえる

捷ちし民主の力、

何處ぞや？

黄金の光 眩ゆく

信仰の影

ほのかなり。

君よ 抜かずや、

再度 君の劍を——それはレニンに似る——

君は 産業革命を 如何に見るか

語れ 君よ！

信仰によりて如何に

經濟革命を制御すべきかを——

うすれ行く ロンドンの

黄昏に、

議事堂の鐘は七時を告げぬ。

大伽藍にも入れられず

風雨にうたれて 君は立つ――

王黨の長袖に

一睨もくれやらず、

劍を抜いて立ちし

その昔忍ばずや！

議事堂を背に

寝れる獅子を下に――君は立つ！

獅子一度立たば

やがては また 今日の英國に

新しき咆哮を聞かん。

うすれ行く夕闇に、

君の姿も うすれ行く！

君が信仰の名によりて

鐘かねがなる！

石いし臺だんの坂さかの上うへに

三さん階かい建ての家いえが立たつ。

七なな十年ねんの、

その昔むかし

十じゅう三さん名めいの有いう志し等らが

協けい同どうの爲ためめ、

立たち上あがり

世よ界かいの爲ためめに、

祝しゅく福ふくを

與あたへたるは

ここの土と地ちぞ！

烟けむりれる街まちに

鐘かねがなる。

黄色くわうしよくに瓦斯がすの光ひかりぞ照てる、

語かたれ クロムエルよ――

再ふたゝび 沈黙ちんもくを破やぶれ――

街がいじやう上の喧噪けんさうを

君きみは眼めもくれず、

偶像ぐうざうの如ごとく固結こけつす、

私わたしは 石垣いしがきにもたれて、

汝なんぢの顔かほを凝視ぎょうしす――

ロツチデールの協同者

烟けむれる街まちに

(一九二五・四・八)

四月ぐもつの日は輝かき、

スコットランドの山々やまは、

紫色むらさきいろに包つまれてゐる。

女王ちよわうメリーの物語ものがたりも、

アガイ侯こうの脱獄だつごくも、

私わたしには單たんなる野獸やじうの昔むかしである。

もう少し長ながく物語ものがたりつてくれ！

ノックスの話を——案内者あんないしやよ！

如何いかに彼かれが魂たましひのためにもだえたかを。

然しかし案内者あんないしやも、

魂たましひのことに就つては心配しんぱいしない。

彼かれはたゞ王わうと女王ちよわうの

傳説でんせつと傳説でんせつを物語ものがたりる。

そして私わたしは暗やみの牢獄らうごくを引廻ひきまされた。

ランカシャーぞ
いそがしき。

エジンバラ城

城は 牢獄の上に立つ。

それが如何に美しからうとも、

私は この城に住む氣がしない。

私にとつては、

凡てが物憂い物語である。

高く聳ゆる城も、

私に取つては、

單に暴力の表象である！

記しるされたる一尺角しゃくかくの

眞鍮板しんちゆうばんぞ 地面ぢめんに埋うめらるゝ。

これぞ わが愛あいする

自由じゆうの士しノツクスのの墓石ぼせきなる。

彼かれが長ながき牢獄らうどくと

困苦こんくののち後に

スコットランドを産うみしこと

わが胸むねに今日けふも残のこる。

その簡單かんたんなる

墓標マへうを わが胸むねにも埋うめよ！

放浪者はうらうしやとして訪おもつれ

放浪者はうらうしやとして去さる、我われを許ゆるせ。

ノツクスよ、

人は來きたり人は去さる

あゝ エヂンバラ、エヂンバラ

おまへもまた たましひ 魂を

忘れんとしてゐる！

(一九二五・四・一六)

I. K. 1572

抑へ難き心地もて

またも ノツクスの

墓石の上に歸り來れり。

ガイルス教會の裏、

議會の前に、

たゞ I. K. 1572 と

我^{われ}は遠^{とほ}き日^に本^{ほん}より

汝^{なんぢ}を尋^{たづ}ねて 來^{きた}る。

自^じ由^いの爲^ために

しばし汝^{なんぢ}と物^{もの}語^{がた}るを救^{ゆる}せ！

エヂンバラの城^{しろ}跡^{あと}は 昔^{むかし}の如^{ごと}く殘^{のこ}れど。

女^{ぢやう}王^{わう}メリーも去^さりぬ。

あゝ されど人^{ひと}の魂^{たましひ}の

あらたまらざるを如何^{いか}にせん――

我^{われ}は靜^{しづ}かに 帽^{ぼうし}子^しを取^とつて

汝^{なんぢ}と我^{われ}の神^{かみ}に祈^{いの}る

スコツトランドに魂^{たましひ}を與^{あた}へよ！

大^{たい}戰^{せん}につかれ、

肉^{にく}慾^{よく}と忘^{はう}却^{きやく}に急^{いそ}がしき、

歐^{おう}洲^{しゅう}に復^{ふく}活^{くわつ}を與^{あた}へ、

汝の墓場には 花も十字架もなし

たゞ 靴跡のみ、汝の墓標を

みがく

さればノックスよ、

此處スコットランドの

四月の冷き風に吹かれつゝ、

我は遠き東より

汝を慕ひて來れり――

時代は移り人は去る

新しき時代に

人は産業の革命を思へども、

魂の革命を思はず、

スコットランドも 酒と女に魂を忘る。

その時 ノックスよ、

機械と物質の爲めに魂の髓まで、
食ひ破られたる二十世紀の爲めに、

また新しき焰をあげよ！

我は鬢をふく北風になやみつゝ、

王の銅像を背にして、

汝を瞑想す――

あゝスコットランドの爲めに語れ！

スコットランドも新しき魂を要す、

ひそかに語れ！

日本の爲めにも語れ！

おゝ神よ、新しき

ノックスを世界に與へよ――

(一九二五・四・一六、)

ノックスの墓標の上に立ちて――

新しき世界の爲めに、

神に祈らん おゝ ノックスよ、

雲は塔と塔の上をつなぎ、

スコットランドの 移りやすき、

天氣は東の放浪者をなやますや大なり。

セント・ガイルスの教會は

世界の魂のなやみを、

忘れたかの如く立ち、

セメントにてかためたる、

廣庭に 街の貧しき子供等は、

嬉々として遊ぶ。

語れ ノックスよ、

その堅きセメントの下より語れ！

新しき魂の自由の爲めに語れ！

塔の下に這入るを、

がへんぜざるべし！

その水筒をさげ、

毛布を背にせる、

勇ましき姿に　我は――

ウエストミンスターにて

流せる涙を、

此處に於ても繰返さん！

西に傾く太陽は、

エヂンバラの最も美しき塔を

斜に射る。

スコットは靜かに

瞑目して南面す。

さらば　詩人よ、

それは正當なりや？

それは正當なりや？

詩人よ、

スコットランドは、

汝の爲めに七重の塔を建て、

リヴキングストンの爲めに、

雨宿をも建てず。

されど

リヴキングストーンは、

満足すべし！

そのうづける魂は、

今は たゞ湖上の美人をのみ

歌ふ可きにあらず

汝の瞑目より醒めよ、

汝の座席より立て！

スコットランドは

烟に包まれつゝあり！

汝の湖水は失せつゝあり、

されば リヴینگストンをして、

再び汝等の中を

歩かしめ、

アフリカならで

このスコットランドの人々の中に、

暗黒のあることを知らしめよ！

白人の壓政や久し、

殉教者よ、

スコットランドの爲めに、

百億萬遍の讚美を讃へよ！

その小山の上に

最も強き人の子等が住むと――

スコットの塔に近く

喧しき電車ぞきしる

詩人よ 夢は破られしか？

スコットランドの山水も

今は産業革命の中心とはなりぬ

百萬の失業者は

その側にうめき

盲目の乞食等は街上に唱ふ

詩人よ 汝の詩は何處ぞ？

ノツトルダムの祈

——巴里にて——

堪^たへ難^{がた}き なやみもて、

また敬^{けい}虔^{けん}を^{さが}探^たす爲^{ため}に、

私^{わたし}は ノツトルダムを^{えら}選^らんだ。

ルーブルをさがして

禮^{らい}拜^{はい}の魂^{たましひ}を 辛^{からう}じて

さがしあてた私^{わたし}の魂^{たましひ}は、

ノツトルダムを^{おとづ}訪^うれて

祈^{いのり}の機^{きくわい}會^{かい}が與^{あた}へられた。

私^{わたし}はそれを うれしく思^{おも}ふ。

その隠れたる牙もて、

支那をほふり、印度をほふれり、

スコットよ 立て！

リヴینگストーンよ 甦れ！

汝の爲めに新しき詩を歌へ！

然らずば 我は、

東方より新しき詩を教へん……

「愛なき山水は

神の爲めの山水にあらず」と

されば 逝く可きものは逝け！

神はまた新しきものを、土より起さん！

(一九二五・四・一六)

スコットの記念塔の前にて――

群がる淫賣婦を恵み給へ。

また酔と放蕩に、

後歸りした巴里を恵み給へ。

私の祈れる中に、

一人二人 聖像に、

跪拜して 過ぐるものがある。

パリの美が何であらう！

王とその家族の藝術が、

何であらう！

主よ 民衆の藝術を與へ給へ！

主よ 疲れたる世界に、

新しき魂と救を與へ給へ！

アーメン！

マリアの聖像の前に、

多くの人は 此處に

見物に來てゐるのだらう。

私の通辯も

私とその氣で來てゐると、

思ふてゐるらしい。

然し私は過去の魂が神に對する、

どれだけの跪拜を持つてゐたかを、

尋ねるためにこゝに來たのだ、

私は 靜かに椅子にもたれて

わが神を 瞑想する。

父なる神よ、

戰爭に疲れたる

フランスを憫み給へ。

マンモントルのカフェーに、

暇ひまつぶしに困こまつてゐる、

巴里パリは 半日はんいちねて、

半日はんいち遊ぶ。

そして地下ちかの労働者ろうどうしゃは、

永遠えいゑんにもがく。

かうして、

永遠えいゑんに巴里パリの藝術げいじゆつは、

ブルジョワの藝術げいじゆつとして残のこるのか？

赤あかい絨緞じゆうたんをしきつめ

金箔きんぱくを五階かいまで塗ぬりつめた

パルコニーに、

美しいParisianが満みち、

タキシードのにやゝかな

三本の蠟燭がとぼつてゐる！

かすかに――

かすかに――

(一九二五・四・二九) 巴里ノツトルダム

テアテル・デュ・フランセエ

巴里の花は 集まるがよい。

美しい言葉は 話されるがよい。

面白い芝居は 演ぜられるがよい。

光も 輝け！

香水も 匂へ！

肉體も――大理石のような――すれ合ふがよい。

藝術が始まる――

物の陳列されたる藝術

人間なき藝術

さうだ――口と眼と耳との組合せ！

然し魂を何處に忘れたか――

私をして静かに

劇場の座席で祈らせてくれ

神――私の魂を舞臺とする神、

新しき人間愛の力を

巴里に教へ、

新しき日に新しき藝術を、

持たしめ給へ！

復讐を忘れ、

怨をとき、

酒の薫を匂はすとも

それが何だ？

パリの宗教は何處に消えた？

人間建築は何處へ行つた？

あゝ 聴てまた

この平和が また永遠に、

語られざる沈黙に 變る時を

汝は豫期するか？

巴里よ、女よ、 Parisian よ

太鼓が鳴る――

幕が上る！

また舞臺に照明燈がつき、

暇潰しの舞用なる藝術――

外題まで『暇潰しの人々』と云ふ

またと 日の光

見ることもなく

彼等は敵にしりへを見せず、

聞かずや 砲彈の爆裂を！

飛行機のうなりを！

地雷火は あしこ こゝに とどろき、

銃劍のきらめき 雷光の如し、

悲しみよ 聲を張り上げて叫べ！

世の終りは 遂に近づきぬ。

人の子は呪の爲めに、

土中に窺居し、

兄弟を殺すべき機会をねらひ、

むぐらの如く土中に穴をうがつ。

何の爲めに 人の子は

世界を愛する力を與へ給へフランスにも。

(一九二五・四)

ヴェルダンの守り

——何處への進撃ぞ——

ヴェルダンの守り 久しく、

英雄は 靜かに、

土中にまで 守をつとく。

見よ 百〇八人の英雄は、

今猶進撃をつとけつゝあるに非ずや。

塹壕に銃劍の尖光見ゆ。

全身土をかぶり、

ヴェルダンは荒原に化して、

猶進撃をつゞく。

靈魂よ 何處への進撃ぞや？

惡に對する進撃か？

愛國の血潮誓ひたる赤心の爲めに、

肉は裂け骨は枯るとも、

猶うしろを見せざる、

魂の進撃か？

魂のラツパは鳴り 太鼓はとどろく

我もまた 彼等の如き、

勇氣持たばや。

霖雨ふる日 ひとり 泥濘にたゝずめば

衷に魂はうなだれ、

天地泣く、

爪なく牙なく作られしか？

人間の皮膚はあまりに軟かなり、

龜の如く 甲羅もあらまほし、

にはかに 砲彈の炸裂きこえ、

百八つの魂は土中に消えぬ。

銃劍のみにして――

戦はやみ、

春雨しめやかに、

その上にふれど、

これ等の勇士は、

今も猶 その銃劍を肩よりおろさざりき、

永遠の行進に――

そはあまりに悲しき行進よ。

敵は既に絶え、

進撃のラツパきかば

銃劍さゝげて 君のあとを追はん。

春雨斜にふつて

驗毛に露す――

萬象蕭然として、

たゞ衝動の爲めに戦きぬ。

されど――土にうつせし、

突撃の聲今もきこゆ――

『ワ』『打』『フ』『ラ』『ー』

そは永遠の戦なるぞ。

地に定められたる宿命ぞ――

森は砲彈の焼くところとなり、

烏さへ影をひそむ。

村落は焼き拂はれ、

静寂谿谷に充つ

土中かすかに、

突喊の聲はきこゆ

そは空しき戦なりき、

人類の煩悶の日なりき。

野性を失ひし哺乳動物は、

英雄の爲めに涙す――

進めよ 英雄よ、

我もまた 靈魂の戦に、

永遠の劍戟を納めじ――

肉おち 骨は碎くとも、

八百萬の人々を殺し、

歐洲の天地を染めたが、

産み出したことは、

争鬭と憎しみのみであつた。

あゝ 生命の神よ、

我等の この盲を開き給へ。

魂の中に 文明を、

知識の中に 革命を、

行爲の中に 熱愛を 與へ給へ。

獨逸ベルリンの美しき街に、

美しく飾れる教會に、

静かに歌ふ 讚美歌の中に、

獨逸の爲めに

獨逸の爲めに

自然と涙が流れる。

破れて破れざる、

獨逸人の爲めに涙が流れる。

私が獨逸人であつたなら、

義憤のあまりに、

泣きつゞけてゐよう。

然し考へてみれば

何の意味もなく

その矛盾むじゆんの爲ためめに亂みだれる。

五月ぐわつの雨あめに、

濕しめりたる 美うつくしきベルリンの鋪道ほだうの上うへに、

私わたしの涙なみだの濕しめりも加くははる――

――ベルリンの地圖の裏に書きつけし詩――

デンマークの雲雀に與ふ

東ひがしの窓まどが白しろむ。

北緯ほくみ五十五度どの五月ぐわつの朝あさは、

眞青まっさむに 澄すんで、

ガラス張ばうの窓まどより、

天空てんくうが見みえる。

わが涙は自然流れる。

破れて 破られ得ざる、

その魂と、

破りて 破ることを欲せざる、

その愛慾の爲めに――

私は泣く。

破り得ねば

戦はぬが善かりしを、

金を貸して また復興し、

復興させて また戦をいどみ、

また敗つて また復興させる、

その人間の徒勞よ 愛慾よ！

私の魂は、

おまへは 力一ぱいに鳴いてゐる。

そんな眞似を私もしたい、

誰れも きか無くとも、

誰れも 邪魔するものなき碧空に上り、
力一杯に 大きな聲が出してみたい。

あゝ 砂丘打續く、

デンマークの西海岸に、

おまへは 巴里でよく、

オペラ・シンガーよりも美しい聲で、

鳴くではないか――

おまへの歡喜の聲こそ、

藝術の爲めの藝術とでも、

云ふべきなのだらう。

朝早くより、

雲雀が鳴くよ、

ほがらかに美しく、

デンマークの雲雀が鳴く。

雲雀よ、雲雀よ、

私は おまへを羨む、

私も おまへのように、

曙の來ぬ前に、

碧空を飛びたい、

アウロラの先驅者が、

未だ 目醒めざる中に、

おまへの如く 目醒めたい。

小さい羽根をふるはせて、

あゝ 凡てがいたましき輪廻だ。

日の下に 一つとして新しいものはない。

魂の噴火が休止した日に、

凡てのものは輪廻を始める。

全くの絶望だ。

これ位なら 私は歐洲を、

見なかつたが よかつたにと思ふ。

それで 私は雲雀として碧空に鳴くのだ。

私の喚叫は歡喜のそれではない。

私の喚叫は絶望の喚叫だ。

救はれざる人生の喚叫だ。

ナザレのイエス以來一九〇〇年を経て、

猶 相戦ふ人生の醜惡に對する

絶望の喚叫だ。

歐洲を彷徨し――

求むる心に満されざる思ひ募り、

寂寥と胸底の喚叫に、

私の魂の喉がはりさけさうだ。

私にも雲雀の喉が欲しい。

私は私の魂の雲雀になつた。

私の魂の碧空に

私は一人旅をする。

羽根はないが私は飛ぶ。

歐洲の天地に絶望して、

私は一直線の上に逃避する。

あゝさうだつた、

歐洲の天地に私は絶望して、

私はデンマークに雲雀の聲を聞きに來た。

泣かないつもりで出たのだ。

それを 歐洲と米國が

私を絶望させ、

私は魂の中に喚叫を、

續けて來た。

私は 私自らを、

難船したハムレットのように、

デンマークの砂丘の蔭に、

身を寄せた。

そして 私の魂の雲雀をして、

心一杯に 鳴かせてゐる。

一生懸命に泣けよ、

雲雀よ——私の爲めに鳴いてくれ、

私は 一人ぼつちの魂の彷徨者だ。

雲雀よ 雲雀よ！

私の魂の雲雀よ！

おまへの姿は 私のかすんだ眼には

見えない！

おまへは あまりに悲しい魂だ！

おまへの運命は、

一人ぼちで 天空に鳴くにある！

私はおまへの正體を見定めようと、

焦點の結ばない眼を無理に努力する。

姿は見えないが鳴き聲だけは聞こえる。

その聲は銀鈴を振るようだ。

そんなに澄み切つた聲で泣かないでくれ！

東の子が悲しくなる。

私は 今度の旅で 勉めて、

私は外側を求めて居ない

内側を求めてゐる。

どうして人間が、

もう少し多く愛すべきかを

求めてゐる。

そして歐洲に失望した。

その動かす可からざる宿命に

私は泣く。

私は雲雀として天空に戦く。

デンマークの雲雀よ、

心一杯に泣け。

東の子はおまへの下で

泣きつゞけてゐる。

誰一人慰めてくれるものが無い。

美人も、英雄も、淫賣婦も、

美術品も私を慰めない。

私は 現代の歐洲に凡て慰めらる可き、

ものを發見しない。

歐洲は百のキリストを殺し

萬の十字架をたて

偽つてキリスト教の假面をかぶつてゐる。

さうだ……慰めてくれるのは

千九百年前に生きてゐた大工イエスのみだ。

さう私の云ふのは

彼のみが愛を知つてゐたからだ。

東の子は 愛し得ぬ

人類の宿命に泣いてゐる――

ウキツテンベルヒの教會にての祈

大能の主よ、

新しく我等に、

改革を教へ給へ。

新しく我等に、

祈ることを教へ給へ。

九十五ヶ條の條文を

今更に新しく

我等の魂の城門にかゝげ、

雲雀よ 叫べ！

喉のはりさけた時に

落ちて来い。

私も 人類の——その愛し得ざる

悲しき宿命に就て

泣くだけ泣かう。

そして泣き疲れた日に

天空から落ちよう。

あゝ 曙の白まざる光に

デンマークの雲雀は

碧空を横切つて鳴く——

曙の遅きを泣いてゐるか？

孤獨の寂寥に泣いてゐるか？

主に祈る――

歐洲の平野に 更に

新しき狼火あげさせ給へ。

愛の主よ、

たえず 新なる生命の父よ、

主よ、十字架よ！

(一九二五・五・二〇 午後二時)

ルーテルの室にて

誰も居らざるを

幸と

私はルーテルの

靜かなる革命に、

強力と戦ひ得る力與へ給へ。

ウキツテンベルヒの

教會のくづるゝ日あるとも、

我等の魂のくづるゝことなき爲めに、

我等を教へ給へ。

獨逸人の信仰は醒め、

サクソニーの平野に、

愛を説くもの絶ゆる日あるとも、

主よ 我等に祈と愛を。

教へ給へ。

誰れも祈るものなき、

その聖堂に、

我一人跪き、

指跡も残つてゐよう。

物語れ、

如何に一人の魂が、

なし得る偉大なる事業の

範圍を――

沈黙の中に、

時は過ぐ、

そして庭の

老樹は

青葉を茂らして伸ぶ

ル―テルよ、

ル―テルよ、

おまへの精神がもう一度

机つくろの隅すみに 跪ひざまついて祈いのつた。

ルーテルの魂たましひよ、

甦よみがへつて来こい。

その簡素かんそな魂たましひよ、

甦よみがへつて来こい。

旺盛わうせいな魂たましひよ 甦よみがへつて来こい。

くさりかゝつた

凸凹でこぼこのある坐板ぎいたに、

ルーテルの足跡あしあとも、

残のこつてゐよう。

足跡あしあとよ語かたれ。

壁かべにルーテルの、

ゴンドラ船

「ウエーウエー」と

漕いで行く、

ゴンドラ船の

面白や！

赤色 白色 卵色

思つた色に、

ぬたくつた、

ヴェニス之都

おもしろや！

水と家との境はくすし、

甦よみがへつてくることは

現代げんだいには頼たのもしきことである。

(一九二五・五・二〇)

サキツテンベルヒ・ルーテルの室にて

ヴェニス

ヴェニスは 浮うかぶ、

海うみの上うへに。

薄うす桃もも色いろの

波なみの上うへに。

あわき思おもひの夢ゆめの上うへに、

ヴェニスは 浮うかぶ

歴史れきしの上うへに。

(一九二五・五・二八)

その自由と敬虔の爲めに。

此處にて殺された、

フロレンスの天才を以てしても、

サボナローラの、

信仰を理解することは、

出来なかつたのだ。

如何に信仰に進むことの、

困難なことよ。

美しく生きんとするものは、

自由を知らない。

私はサボナローラの、

記念碑の上に立ちて、

信仰の自由を思ふ。

表玄關龍宮おもてげんくわんりゆうぐうにつゞく。

ゴンドラ船ぶねのおもしろや！

(ヴェニスにて)

サボナロラの墓石の上に立ちて

メヂチの王宮わうきゆうの前に、

サボナロラの記念碑きねんひぞ、

横よこたはる。

そは 民たみにふまれ

黄金色こがねいろに光ひかる？

一四九八年ねんに、

サボナロラは、

夜と晝の彫刻に、

メデチ一家の盛衰を語る。

悲しみの子は

絶望を思ふ――

フロレンチンは、

天才を持つ、

その石は今も猶、

我等に物語る、

飾りもなく、

禮拜もなく、

たゞ石をして、

語らしむることの心持ち。

あゝ光――光

眞白に光る光――

メヂチの墓にて

昨日きのふの如ごとくミケロ・アンゼロが

我等われらに話はなしかける。

藝術げいじゆつの傷いたみに、

創作さうさくを捨すてゝ、

ローマに去さつた、

その心持こころもちが

あまりに明あきらかに

石いしを通とおして語かたる――

眞白ましろに光ひかる

記念塔きねんたふに、

Giotto の Francis を見た

フランシスが實在として、

私に祭壇の上より、

教へてくれる、

Giotto の素朴なる、

筆付に、

その師に對する

敬虔なるおもゝちに。

フランシスの

天才的な青白きおも長の顔に、

惜しまれたるその死に、

私はフランシスの大きな魂を思ふ。

フランシスカンの僧侶が、

今も昔の茶褐色の衣をきて、

アンゼロのウルビノは

永遠えいゑんに考かんがへて

今いまもその謎なぞをとかず

いつまで考かんがへつゝあるか？

ウルビノよ、

世界せかいの盛せい衰すいは

如何いかになり行ゆくか？

教をしへてくれ

永遠えいゑんの謎なぞを――

ジオツトの畫けるフランシス

永ながく希き望ぼうしてゐた

Gioto よ、

永遠えいゑんに語かたれ！

カタコム

蠟燭ろうそくの光ひかりたよりに

道みちを行ゆく

カタコムの闇やみの

くしくもあるかな——

(カタコムにて)

寺院じいんの中なかをうろつく、

フランシス――

彼の死かれは永遠えいゑんにをしまれる。

否いな 彼の死かれがをしまれるのでなく、

彼の精神せいしんの死しが

惜をしまれる。

Giotto よ 永遠えいゑんに語かたれ。

百年ひゃくねん後の Francis を

思おもひ出だすのでなく、

八百年ひゃくねん後の Francis を思おもひ出でて、

私わたしは彼の精神せいしんの

亡ぼろびたことを悲かなしむ。

フロレンスよ、

永遠えいゑんに若わかかれ！

月は過ぎ、

日は急げど、

急がざる人心、

城壁のかなた、

人の子等は騒げど、

救はれざる　その倦みし心――

メシヤの胸に

何事のうつりけん、

弟子を捨てゝ　幾十歩、

石の届くところ、

彼は跪き、

受く可き　苦き杯に就て　祈る。

『み心ならば――』

父よ――　この苦き杯を、

ゲツセマネ

樹老きねいて

昔むかしを告つげず。

美うつくしの門もんは

のぞけど、

既すでに閉とぎされて 幾いく歳とせ。

たゞ 變かはらざる月つき蔭かげ、

シオンの山やまを越こえて

斜ななめに落おつ。

園そのの主ぬしは何處いづこぞや？

悲かなしみの主しゆは何處いづこぞや？

わが足元あしもとの土濕つちうるほふ。

石いしの叫さけび　土つちの聲こゑ、

今猶いまなほ　我われはさく。

天地あめつちの主しゅ、

人ひとの子この爲ためめに悶もだゆ。

橄欖山かんらんざんのほとり、

ゲツセマネの園そのは　失うせ行ゆくとも、

いつの日ひか　メシヤの涙なみだの、

消きゆ可べき。

悲かなしみの子こよ　嘆なげけ！

その聲こゑ天地てんちに満みつ。

死海しかいのほとり、

凡すべてのもの　憂うれひに沈しづむ、

人ひとの子この甦よみがへりも、

取り去り給へ——されど——

わが心の儘を、

なさんとするに非ず

み心の儘になさせ給へ」

かく 祈りし君の心、

今偲ばすや、

橄欖は枯れ、

土は乾き、

園の姿變れど、

變らざる人間の醜惡の爲めに、

キリストの嘆き、

今もきこゆ。

此處に落ちし、

その涙 今もかはらず。

時は経ても、

咲く日がくれば、

主はをらねど、

春を知る。

澄めるユダヤの、

夏の空。

おまへの、

花のいじらしや！

眞赤に染めた、

花瓣に、

昔の愛の燃え上る。

窓はくづれて、

家は絶え、

垣根はあれども、

人の魂たましひに徹てつせざりき。

シオンに鐘かねは鳴なれども、

人ひとの子こ 未いまだ 救すくはれず。

あゝ 十じ字じ架かの主しゆよ、

君きみは 今いまも 猶なほ

此この園そのに跪ひざまづかずや

その姿すがた 魂たましひに見みゆ――

ユダヤの國、ゲツセマネにて (一九二五・六・八)

ベタニアのマルタの家

マルタの家いへの

柘榴ざくろの花はなよ。

悲^{かな}しみの聲^{こゑ}はすれども、

救^{すく}はれざるエルサレムよ、

そは地球^{ちきう}の終末^{しゆまつ}の日^ひまで、

救^{すく}はれずして残^{のこ}るであらう。

あゝ エルサレムよ！

エルサレムよ！

シロアムの池に 眼を洗ふもの

シロアムの池^{いけ}に

眼^めを洗^{あら}ふものは

誰^{だれ}だ？

そは 古^{ふる}きユダヤの盲^{めくら}ではなく

庭もなく、

サボテンの刺おそろしく、

垣をのぞけば主もなき、

昔の愛は今何處？

あゝ エルサレムよ

あゝ エルサレムよ、

エルサレムよ、

預言者を殺し、

そを石にてうてるものよ、

今日も猶 魂を干物として取扱ふ、

エルサレムよ、

宇宙の奥底まで見たい、

地殻の中側に何かがあるか？

物質の不滅は何を意味するか？

光が欲しい——光が——

靈魂につき、生命につき、

価値と實在の關係に就て光が欲しい。

男女の關係に就て光が欲しい。

愛したい、愛せない。

それに就て光が欲しい

何故 神は人間の生命を

五十年に限つたか

それに就ても光が欲しい。

我等は實に見えなことを願ふ。

今日の凡ての人間の努力は

東ひがしの國くにから來きた、

五尺二寸しやくすんの小男こをとこではないか？

彼かれこそ 光ひかりを欲ほつしてゐたのだ。

長年ながねんの眼病ぐまんびやうに、

彼かれは 癒いされんことを待まつてゐた。

そして 今いま、シロアムに來きて、

主しゆが古ふるき昔むかし 宣のたまひし如ごとく、

眼めを洗あらつてゐるのだ。

二三十の階段かいだんをおりて、

小川をがはのようになつた流れながに屈かみ、

彼かれは イエスの昔むかしを思おもひ出だして、

理屈りくつもなく

湧わき出いづる泉いづみに、眼めを浸ひたす。

見みたいのは肉眼にくぐらんばかりではない。

「神よ エルサレムを興し給へ」

悲しき聲をあげて

ユダヤ人は

ダビデの城壁に接吻して嘆く――

その聲、あまりに悲し。

潮の如く高まり行く、

その聲は

東より來た、

私をも悲しましめる。

縦に横に 身體を振り、

安息日の夕より朝まで、

嘆きつゞくる、その態――

或物は讃歌の、

音吐を取り、

無ではないか？

それに就ても光が欲しい。

何故に我等は食ひ、

何故に我等は戀し、

我等は嫉妬するか？

我等はいと小さく

宇宙はそんなに奥深い。

我等は永遠に解かざる謎の前に座る。

願くは神 我等に 光を與へ給へ。

神よ エルサレムを興し給へ

『神よ エルサレムを興し給へ』

美しの門

嘗て開かざる、

美しの門よ、

いつになつたら

ひらくのか？

開いた時に

また来よう！

たとひ イエスが来たとしても、

戦争のないようにしてほしいね！

もしもイエスが、

刃を以つて来るなれば、

會衆くわいしゆうはコーラスを

口々くちくに唱となへる

一時ときすめばまた

しばし しづまり、

一時ときしてまた 高たかまる、

それは嵐あらしの呼吸こきふに、

似にてゐる――

ユダヤ人じんは嘆かなかずとも、

私わたしはユダヤ人じんの爲ためめに、

嘆かなかう！

主しゆよ――エルサレムを、

ユダヤ人じんに歸きし給たまへ――

エルサレムを ユダヤ人じんの爲ためめに

興おこし給たまへ！

水のめば、

イエスの昔偲むかしばるゝ、

ゼベダイの子こらの、

網干あみほせし、

ところは何處いづこ、今いまむなし。

たゞさどなみの嘯さみきの

今いまも昔むかしも變かはるなし。

サハラの砂漠に日が沈む

サハラさハラの砂漠さばくに、

日ひが沈しづむ。

眞赤まっかに焼やけた、

開かないでおけ、いつまでも。

そして石が朽つる日、

くづるゝが善い――

ついで石垣全部を

破壊して終へ！

私がエルサレムの總督なら

之等の傳説を全部

たゞき壊して了ふのに。

カペナウムにて

美しいガリラヤの海に、

顔を浸して、

愛する日本

日本にほんの國くにへが

聞きこゆる故ゆゑに、

友等ともらのもがきが、

通つうずる故ゆゑに、

私わたしは日本にほんに直行ちよくかうする

愛あいする日本にほん——

Nippon du Bella——

日が沈む。

一直線に畫かれた、

茶色の砂漠は、

海のごと、

光をうけて 反射する。

サハラ の 砂漠に

日が沈む。

眞赤にやけた

日が沈む。

さよなら「今日」よ さよなら！

砂漠の私に

日が沈む——

眞赤に焼けた

日が沈む。

永遠の乳房

XII

永遠の乳房

故郷こきやうを捨てた アブラハムは、
砂漠さぼくの 飢うえを 充分じゅうぶんに知しつた。
羊ひつじも 山羊やぎも 飢うえた。
そして 自分じぶんも 父ちちも 妻つまも、皆飢みなうえた。
然しかし、彼かれは歸かへらうとは云いはなかつた。

ハダン・アラムにも 恩めぐみは附添つきそふて來きた。
彼かれは飢うえの 後のちに 恩めぐみを知しつた。
しぐれが降ふつて 青草あおぐさが 出でて、
山羊やぎの 乳ちが ふくれて來きた。

アブラハム　ひとりが、

いくら　乳房ちぶさをなめづりまはしても、

盡つきるようなことはなかつた。

カナンは、から／＼の砂地すなちであつても、

そこは　乳ちと蜜みつの流ながれるところであつた。

その乳ちは下したに流ながれるのでなくて、

上うへから流ながれるものであつた。

まだ　産うれたばかりで、

眼めも充じゅう分ぶん見えぬ犬いぬの子こが、

母犬はいぬの乳房ちぶさにぶら下さがつて、

まだ土つちを多おほく踏ふんだことの無ないその前肢まへあしで、

ギユ／＼と乳房ちぶさを踏ふみつけ、

軟やわらかい頬ほぺたを、

アブラハムは 山羊の乳で養はれた。

天から 大きな乳房が

ぶら下つて居るのが見える。

エル・シヤダイの神は 天の乳房の神であつた。

彼の至るところに、

天から 乳房が ぶら下つてゐる！

荒野のアラムにも下つて居れば、

砂漠に近いペルシバにも ぶら下つてゐる。

マクペラの橡の木の下にもさがつて居れば

マモレの 壇の側にも下つてゐた。

神の乳房は 太くて 大きい。

それはいつでも、

よく脹つて居る。

アブラハムにとつて、

天てんの乳房ちぶさは凡すべてゞあつた。

大きな眼めに 涙なみだを一杯はい貯ためて

たゞ 天てんの乳房ちぶさに

唇くちびるをすり寄よせることだけが彼かれに残のこつてゐた。

そして 天てんの乳房ちぶさは

嘗かつて 彼かれを失望しつぱうさせたことはなかつた。

アブラハムの吸すふた乳房ちぶさは

私わたしの吸すふ乳房ちぶさである。

私わたしの上に 横よこに、

天てんの乳房ちぶさが無む数すうにぶら下さがつてゐる。

私わたしはまだ生うまれたばかりの犬いぬの子こだ！

膏^{あぶら}で つやくした乳房^{ちぶさ}にすりつけ、

舌^{した}なめづり廻^{まは}して 呑^のんでゐるように、

アブラハムは 神^{かみ}の乳房^{ちぶさ}に吸^すひ附^ついた。

それは 果^{はて}しなく出^でるよ！

悲^{かな}しみに 憂^{うれ}ひに、

乳房^{ちぶさ}は唯一^{ゆい}の慰^{なぐさ}めであつた。

放浪^{はうらう}の旅^{たび}に氣^きのうゑたる時^{とき}、

天^{てん}の乳房^{ちぶさ}は 暗夜^{やみよ}の寢床^{ねどこ}の唯一^{ゆい}の慰^{なぐさ}めであつた。

父^{ちち}テラが永逝^{えいせい}した日^ひ、

甥^{をひ}のロトが捕虜^{ほりよ}になつた日^ひ、

最愛^{さいあい}の妻^{つま}サラが ひとり兒^こを残^{のこ}して地上^{ちじやう}を去^さつた時^{とき}、

彼^{かれ}のたゞ一つ^{ひとつ}の望^{のぞ}み、

愛子^{あいし}イサクを 人身御供^{ひとみでぐう}に捧^さげよとの

み聲^{こゑ}を聞^きいた瞬間^{しゆんかん}、

泉の乳よ 湧き溢れよ！

永遠の乳よ、私を見放すな！

今迄養はれて來たその乳房よ！

何處へも行くな！

私は盲で 先が見えない、

おまへが無ければ一日として生きては行けない

然し 不思議と云へば 不思議だ。

よくもまア 今日まで續いて來たことだ。

ウルを出たその日から、

地上に取るべき食物とては一つだに無いのに、

天の乳房は 何處にも附き廻つて、

一日として 飢えかつれたことは無い。

その乳は魂の髓までも濕し、

心の傷まで癒してくれる。

それなのに、神は猶も、私の爲めに、

そこに横たはつて下して、

その乳房を惜しげもなく、

投げ出して下さる！

貧乏に、困苦に、窮迫に、

讒誣に、迫害に、エル・シヤダイの神は、

今も猶、私に乳房を吸はせて下さる。

私の住むところは、

川の向のヘブルの地、

荒野に近きペリシテの人の住むところだ、

たとひ熱風が、

私のテントを巻きあげることが有つても、

天の乳房は姿を隠したことが無い、

それは こん／＼として盡きざる泉だ。

おまへは何を食つたので、

そんな美しいものを出すようになったのだ？

それは 神様がお出しなさるのではないか？

私にもすはせてくれ、妻よ、

その神のお搾りなさる温き乳を！

私は妻の二つの乳房の間に 顔を埋め

神の奇蹟に感激する。

育つのは 坊やばかりではない！

世界の赤ん坊が みんな育つのだ。

そして、私も育つ！

永遠の乳よ！ 永遠の乳！

神の懷から溢れ出づる 永遠の乳よ！

それは、むつかる孤兒にも、魂の糧であり、

拗ね、ひねくれた 私の魂にとつても、

價值もないのに 懷の中に入れてくれて、

毛深い 温い皮膚近く私を引きよせ、

私の眼から涙を吸ひ取り、

私のわななく手をしつかり押へ、

『もう おびえるなよ、

しつかりしなさい』と――

耳元に囁いて下さる。

何と云ふ大きな恩であらう、

果しのないその愛！

雪のように白い乳が だぶくと、

桜色した母の乳房から流れ出る。

母の乳房は、神の乳房だ！

『妻よ おまへの乳房をいらわしてくれ！

何と云ふ、不思議な仕掛がそこにしてあるのだ。

乳ちが流ながれる——天てんの乳ちが！ 天てんの銀河ぎんがにも乳ちが湧わく！

「乳ミルクの道ウエー」とはよく云いふた。

さらば私わたしの魂たましひは

もう、此上このうえ饑うえることがない。

永遠えいゑんの乳房ちぶさが 私わたしを待まちつてゐてくれる

あゝ 永遠えいゑんの乳房ちぶさ！ 永遠えいゑんの乳房ちぶさ！

最上さいじやうの糧かてである。

妻つまよ、まア、おまへの乳ちちの輝かどやくことよ！

それは 神かみの懷ふところから、

直接ちよくせうに管くだを引ひいたものだなア！

永遠えいゑんの乳ちちよ、湧わき上あがれ！

妻つまの乳ちちは とまるなよ！

坊ばうやも育そだてば、私わたしも育そだつ！

ほんとに、私わたしのような みなしごが、

葺茅あしそしのほとりで育そだつたのも、

全まづたく、神かみの乳房ちちぶさのお蔭かげではないか？

娼婦しやうふの子ことして産うまれ、

汚芥箱ごみばこの側そばで育そだつた私わたしが、

辛からうじて ひとり歩あるきの出来できるようになったのも、

全まづたく、神かみの乳房ちちぶさの、お蔭かげぢやないか！

大正十四年十二月九日印刷
大正十四年十二月十二日發行

(一—三〇〇〇)

永遠の乳房

□定價金二圓五十錢

版權所有



著者

賀川 豊彦

發行者

東京市京橋區南金六町九番地
福永 一良

印刷者

渡邊 吉郎

版元

東京・銀座・新橋
福永

書店

振替東京四〇四六六番
電話銀座一五八七番

福永書店刊行書目

徳富健次郎 著

□ 小説 富

士 第一卷

定價金二圓
送料金二十錢

徳富健次郎 著

□ 新

春

定價金二圓三十錢
送料金二十錢

徳富健次郎 著

□ みづのたはこと

定價金三圓五十錢
送料金二十四錢

徳富健次郎 述

□ 竹

崎

順

子

定價金四圓五十錢
送料金二十七錢

徳富健次郎 著

□ 小説

黒い眼と茶色の目

定價金二圓三十錢
送料金二十錢

厨川白村 著

□ 象牙の塔を出て

定價金二圓八十錢
送料金二十錢

厨川白村 著

□ 十字街頭を往く

定價金二圓五十錢
送料金二十二錢

井手訶六 著

□ 炬を翳す人々

定價金二圓八十錢
送料金二十四錢

木下利玄 著

□ 李

青

集

定價金二圓三十錢
送料金二十錢

地殻を破つて

四六判總布製
著者自筆挿畫二葉
定價金二圓八十錢
送料金二十二錢

賀川豐彦著

地平線の一角から高くオリオンが登る、夜は更けたのだ、曙の光も遠くはない、然し闇の地球には憎惡と怨恨が、争鬭と掠奪が、貧困と冷酷が狂ひ呻く。人間より金銀の愛される時代、眞理より偶像の尊ばれる世界、『地殻を汚す者よ!』と、地球の靈は人間に向つて悲しく叫ぶ。此時、自ら貧者の間に坐り、光を携へて絶望者の友となり、老人の死の床に末期の水を汲む、かしこに神殿を興し、こゝに嘆ける魂に光を指さす。驕れる者には逆はず、乞食の爲には塵を拂ひ、巷の淫賣婦には復活を語る。先驅者の道は常に淋しく痛ましい。然し曙の光は何時も其の十字架の蔭から登るのだ。『地殻を破つて』(貧民窟十年の十字架の記録)は正に黒土をつん裂いて萌え出づる人類の春の音づれではないか。

賀川豐彦著

□ 貧民窟
詩集

涙の二等分

近日發行

目録

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

本不詳支那口幸 青 榮

GTU LIBRARY



3 2400 00559 9380

GAYLORD	PRINTED IN U.S.A.

PRINTED IN U.S.A.

GTU Library
2400 Ridge Road
Berkeley, CA 94709
For renewals call (510) 649-2500
All items are subject to recall.

